纂編峰竹山中　閲校秋和倉名
新軍大
體歌全

東京
市
田
氏

名倉知秋校閲　中山正一郎編纂

新撰軍歌大全

大阪圖書出版會社藏版

序

馬を鴨綠江に息らひ槊を越山に横ふる時、一唱三軍の士氣を振ひ、花を三吉野に咏じ月を須磨明石に吟する時、忽ち俗を脫し神化し氣融す、之れ蓋詩歌の妙なり其大なるや覆載間の萬物を驅て一言に籠め其微なるや幽玄を人間腦裏最後の琴線に感せしむ情に成りて情を動かすの深きの詩歌を措て他に見る可らざるなり今世詩歌に新体あり邦語七五言を聯ねて短は數十言長は數百言に至り克く幼童婦女も雖も吟哦するを得べし頃日竹峰中山君新体詩歌中上は忠君愛國より下は吟花咏月に至るまで吟誦の間苟も人心を煥發して世道を益するものを蒐め一書となし序を予に請ふ其意の在る處推すべきのみ乃ち一言を卷首に題すと云爾

明治辛卯七月　　名倉知秋誌

凡例四則

一本書蒐むるところのもの二、曰く新体詩歌曰く長歌、而して新代詩歌中吹奏歌あり軍歌あり

一本書軍歌大全と名くる所以のもの卷中其多きを以てあり其他は一唱三嘆に堪へざるものを蒐む

一我邦在來の長歌格調新体詩歌と髣髴して而して用語最も美なり然れども採るへきあり採る可らざるあり本書載する所のもの人口に上り特に絶調となすものを選ふ

一本書所載の長歌幼童咏唱の爲め或は調をかふるありかへざるあり觀者諒焉

明治廿四年第七月　編者識

軍歌大全目次

○君が代　一
○海ゆかば　一
○皇御國　二
○國の鎮め　三
○命をすてゝ　三
○扶桑歌　四
○わらきいはね　五
○大君の　五
○吹きおす笛　六
○行軍歌　七
○進軍の歌　八
○抜刀隊の歌　一〇
○軍歌　一五
○護國の歌　一九
○兵士の歌　二四
○熊本籠城の歌　二六
○日本魂　三〇
○凱戰の歌　三三
○軍旗の歌　三六

○扶桑歌　四〇
○王政復古の歌　四〇
○カムプベル氏英國海軍の歌　四三
○テニソン氏輕騎隊進擊の歌　四六
○楠公櫻井驛に正行へ遺訓の歌　五〇
○小楠公を詠ずる歌　五一
○正行吉野參内の歌　五四
○擬舞曲歌　五九
○僧月照入水を悼む歌　六〇
○西鄕盛隆追慕の歌　六四
○東叡山懷古の歌　六七
○ブルウムフサールド氏兵士歸鄕の歌　七二
○シエークスピーア氏ハムレット中の一段　七八
○ホーヘンリンデン戰爭の歌　八一
○櫻の歌　八六
○ロングフエールロー氏人生の詩　八九
○グレー氏墳上感懷の詩　九四
○自由の歌　一〇八
○チヤールス、キングスレー氏の悲歌　一一二
○高僧ウルゼーの詩　一一六

○シヤール、ドレアン氏春の詩　一一九
○テニソン氏船將の詩　一二〇
○春夏秋冬の詩　一二六
○四時　一二八
○刺客を咏ずる歌　一三〇
○花月の歌　一三五
○擬悲白頭翁詩　一三九
○春の眺望　一四三
○送學友歸鄕歌　一四五
○夏夜卽事　一四九
○秋の夕　一五一
○秋夜客舍　一五二
○湘南秋信　一五四
○寒村夜歸　一五六
○世渡りの歌　一五九
○女子に告ぐ　一六四
○新年小學生徒に寄す　一六八
○鎌倉の大佛に詣でゝ感あり　一七〇
○ヘンリー四世　一七五
○題秋（西詩和譯）　一八一

目錄畢

○西詩和譯　一八四
○西詩和譯　一八五
○社會學の原理に題す　一八六
○熊谷直實曉に敦盛を追ふ歌　一九五
○玉の緒の歌　一九八
○外交の歌　二〇二
○ロングフエルロー氏兒童の詩　二〇三
○離別の曲　二〇七
○送友　二〇八
○見蝸蛾有感　二〇九
○藤袴の歌　二一〇
○小督の歌　二一二
○東の花　二一四
○長恨歌　二一六
○櫻がり　二一九
○芙蓉を咏する歌　二二一
○西行の歌　二二三
○謫居の歌　二二四

新體軍歌大全

名倉知秋閲
中山竹峰編

第壹號

○君が代

君が代も　千代に八千代に
さゝれ石の　いはほとなりて
苔のむすまで

天皇及皇太后皇后皇太子皇太子妃皇族ニ對シ敬禮ヲ表スル片ニ用ユ

第二號

○海ゆかば

海ゆかば　みづく屍
山ゆかば　草むす屍
大君の　へにこそしなめ
あだには死なじ

將官及相當官並ニ將官ノ職ヲ奉スル大佐ニ對シ敬禮ヲ表スル片ニ用ユ

第三號

○皇御國

皇御國の武士は　いかなる事をか務むべき
唯身にもてる誠心を　我大君に盡すまで

軍隊相逢フ時ニ用ヒ

第四號

靖國神社參拜等ニ用ユ

○國の鎮め

國の鎮めのみやしろと
今日の祭は賑はひを
治まる御代をまもりませ

第五號

○命をすてゝ

命をすてゝ大丈夫が
在べき限り語りつぎ
絶せずつきじ萬世も

第二百十五號

○扶桑歌

わが天皇の治めしる
八百萬代も動かねど
治めたまへばとよとはに
四方に輝く御稜威は
かゝるめでたきわが國ぞ
天皇が恵にむくはんと
盡せよや人ちからをも

いつきまつらふ神みたま
天かけりてもみそなはせ

一般葬禮ニ用ユ

たてし功績ハ天地の
いひつぎもかむ後の世に

分列式ノ時ニ用ユ

わが日本は萬世も
神の御世より神ながら
動かぬ御代とかはらぬぞ
月日のごとく照すなり
やよ國民よ朝夕に
心を合せひたぶるに
あはせてつくせ人々よ

第二百十八號

○あらきいはね

あらき巖石をふみ割み
武士の身の常ぞかし
いむかふ寇はひけふへつ
宸襟をやすめまゐらせむ

第二百十九號

○大君の

大君の
いさを尊みまつろはぬ
人をやはしてたひらけく
みいづかしあし御軍の
そのいさをはや

第二百貳拾號

○吹きなす笛

ふきなす笛の其ふとも
ものゝ哀れをしり顔に
三千百萬の敵軍も

登坂ノ時ニ用ユ

險しき坂を越ゆくも
習せや慣る君がため
歸りて早く我君の
急げや急げ御軍よ

師營行進ノ時ニ用ユ

御稜威かしこし御軍の
國をことむけ千早振る
かへるれをひは大君の
功績貴とし其みいづゝや

葬禮ノ途上ニ用ユ

捧ぐる旗の其色も
今日は物こそかなしけれ
取てきぬべきますらをと

われもへる我等が袖までも
涙の雨にぬれにけり

○行軍歌

我が日本の國体ハ
神の御國と稱へきて
遠き戎夷が國までも
射や草葉の露計り
類も少なき緒環の
守るは誰の職務ぞや
五の訓へ戒銘肝して
多聚かる人の其中に
厚き仁恵は駿河なる
伊勢の海すら尚は淺し
寇あす戎夷有もせば
討ち夷げて大君の
古き神代の頃よりも
五百海坂隔てたる
光輝く旭子の
侮り受けし例しだに
盡きぬ皇帝の功績を
誠實ある身は甘美にも
東のあひだも忘るなよ
醜み御楯と拔擢れて
不二の高峰も尚は低く
其の皇に若しや又
躊躇ふ事はなきものを
御心慰め奉れ人

○進軍の歌

彈丸は霰と空にとび
雷まがふ砲聲に
我魂の緒も打絶ん
劍は野邊の電か
吹きくる風も腥さく
今はの時ぞ勇ましく
進むに猛き武士は
屍は野邊に曝すとも
櫻も匂ふ九段坂
祭り納にし諸靈は
寇あす戎夷盡るまで
などや厭はん敷島の
堅きに堅き金剛の
人皆あべて美慕す
故郷人に品格高く
躊躇ふ事はなかりけり
名は後の世に香ばしく
空に聳ゆる靖國の
是れ大丈夫の龜鑑あり
もしや火の中水の底
倭魂飽くまでも
石より光りかゞやくは
青白あせる桐の章
錦を飾る心地よさ

○抜刀隊の歌

其一

我は官軍我敵は
敵の大將たるものは
之れに從ふつはものは
鬼神に耻ぬ勇あるも
起せしものは昔より
敵の亡ぶる夫までは
玉散る劍抜つれて
天地容れざる朝敵ぞ
古今無双の英雄で
共に慓悍決死の士
天の許さぬ反逆を
禁えしためし非るぞ
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

其二

六皇國の風と武士は
維新以來廢れたる
又世に出る身の譽れ
刃の下に死ぬべきぞ
死すべき時は今あるぞ
敵の亡ぶる夫までは
玉散る劍拔つれて

其三

前を望めば劍あり
劍の山に登るのゝ
此世に於て面のあたり
我身の爲る罪業を
賊を征伐するが爲め
敵の亡ぶる夫までゝ
玉散る劍拔つれて

其四

劍の光り閃くは
其身を守る魂の
日本刀の今更に
敵も味方も諸共に
日本魂あるものは
人に後れて耻かくな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

右も左も皆つるぎ
未來の事と聞つるに
劍の山に登るのも
滅す爲にあらずして
つるぎの山も何のその
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

雲間に見もる電か
四方に打出す砲聲は
敵の刃に伏す者や
絶て果なく死する身の
其血は流れて川を爲す
敵の亡ぶる夫までは
玉散る劍拔つれて

其五

彈丸雨飛の間にも
進む我身は野嵐に
果なき最期遂るとも
死して甲斐ある者なれば
我と思はん人達は
敵の亡ぶる夫までは
玉散る劍拔つれて

其六

我今此に死なん身は
捨べきものは命あり
忠義の爲に死する身の

天に轟く雷か
彈丸に碎けて玉の緒の
屍は積て山をなし
死地に入るのも君の爲め
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

二つ無き身を惜まずに
吹れて消る白露の
忠義の爲に死する身の
死するも更に憾なし
一歩も後へ引なかれ
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

君の爲なり國の爲め
假令屍は朽るとも
名は芳しく後の世に

永く傳へて殘るらん
義もなき犬と云るゝなる
敵の亡ぶる夫れまでは
玉散る劍振つれて

○軍歌

第一

來れや來れいざ來れ
寄せ來る敵は多くとも
死すとも退くと勿れ

武士と生れた甲斐もなく
臆怯者ぞと誹られな
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

第二

進めや進めいざ進め
劍は林を爲すとても
死すとも退くと勿れ

御國を守れや諸共に
恐るゝ勿れ恐るゝな
御國の爲なり君のため

第三

勇めや勇め皆勇め
御國を守る兵士は
死すとも退くと勿れ

彈は霰と飛び來るも
ためらふとなく進み行け
御國の爲なり君のため

第四

劍も彈もなんのその
身は鐵よりも猶堅し
御國の爲なり君のため

勉めや勉め皆共に
汚せしものぞと後の世に
死すとも退くと勿れ

汚しとなき國の名を
言れぬやうにと覺悟して
御國の爲なり君のため

第五

思へよ懷へ能く懷へ
我身の失せざる其中は
死すとも退くと勿れ

神より受けたる此國は
人手に決して渡さずと
御國のためなり君のため

第六

守れや守れ皆守れ
恐るゝものは父母の
死すとも退くと勿れ

異國の奴隷と成ることを
墳墓の國をば能く守れ
御國のためなり君のため

第七

恐るゝ勿れ恐るゝな
國をば愛する兵ものに
死すとも退くと勿れ

民をば愛する我君と
勝つべきものは世に非ず
御國の爲なり君のため

第八

進めや進め皆進め
命を惜まず進み行け

腐りし心のなきものは
御國の旗を押立て

死すとも退くと勿れ

第九

進めや進め皆進め
進めや進め皆進め
死すとも退く事なかれ

○護國の歌

汝等朕の肱股ぞと
義は山岳も啻からず
護れや守れ軍人

○

我を育てし父母の
父母に孝ある者からば
護れや守れ軍人

○

國の大事に死するのは
水火の中も何のその
護れや守れ軍人

○

御國の爲あり君のため
御國の旗を押立て
祖先の國を守りつゝ
御國の爲なり君のため

最とも惶きみことのり
死は鴻毛と覺悟して
皇國を護れ諸共に

墳墓の國とは此國ぞ
死して忠義の鬼となれ
皇國を護れ諸共に

兼て覺悟の前あるぞ
忠義と名譽を精にして
皇國を護れ諸共に

寄せ來る敵は多くとも
旭のみえた押したてゝ
護れや守れ軍人

○

二千五百有余年
汚せし者ぞと後の世に
護れや守れ軍人

○

丸は霰とぢくるも
大和魂あるものゝ
護れや守れ軍人

○

劍も我身にたちはせじ
皇國を護る兵ものゝ
護れや守れ軍人

○

昔よりして今までも
國を愛する兵ものに

當る鋒強くとも
一歩も後に退かず
皇國を護れ諸共に

汚れしとあき國の名を
笑れぬ樣覺悟して
皇國を護れ諸共に

劍は柿をあすとても
恐るゝとはあるべきか
皇國を護れ諸共に

丸も我身はとほし得じ
身は鉄よりも尙堅し
皇國を護れ諸共に

民を愛する大君と
かつべき者ハ世にあらじ

護れや守れ軍人

○

文明開化の春風に
我敷島の山櫻
護れや守れ軍人

○

昇る旭と國の名を
千代も八千代も萬代も
護れや守れ軍人

○兵士の歌

皇國の爲と君のため
我國むかし忠臣と
皇ら帝の御爲に
ともに屍は消れども
我大君の御稜威と
共に世界に輝けり

○

皇國の爲と君のため
皇國を護れ諸共に
今を盛りと咲き匂ふ
異國の風に散さじと
皇國を護れ諸共に

地球の上に輝かし
香しき名を殘さんと
皇國を護れ諸共に
力を盡すは人の義務
仰ぎ尊む楠公は
湊河原の朝露と
香しき名は今もおほ
我日の本の國光と
共に世界に輝けり

兵士とあるは民の義務
國に寇なす敵あらば
君に叛ける賊あらば
彈丸も中らば避けはせず
功名手柄顯して
其名を世界に輝かせ

○

皇國の爲と君のため
死人の山を踏越えて
屍をあれ野に曝すとも
天翔り來て事あらば
精國神に祭られて
其名を世界に輝かせ

○熊本籠城の歌

西も東もみな敵ぞ
寄せ來る敵は不知火の
世にも名高き猛ら夫の
西九州に名も高き
敵の總督隆盛は
進んで之を打攘へ
進んで之を打攘へ
劍も我身を刺ばさせ
我日の本の國光と
其名を世界に輝かせ

死するは兵士の常なるぞ
劍花の下に斃るべし
おほ其靈は消やらず
國と君とを守るべし
我日の本の國光と
其名を世界に輝かせ

南も北もみな敵ぞ
筑紫のはての薩摩方
たけり狂ふて攻め來り
熊本城を囲みけり
古今無双の豪傑で

之に從ふ大將は中にも逸見十郎太其外兵士二三萬進み打出す砲聲に天地は崩れ山河は動かぬものは君が御代忠義の旗を振かざし唯一筋に國の爲め過ぎし普佛の戰に長く靑史を汚したり千早の城の楠公か谷少將を始とし家をも身をも打忘れ此時都の方よりは多くの官軍出陣す空飛ぶ鳥のそれならで城中城外もろともに折柄たけき若者が桐野篠原村田など慓悍決死の烈丈夫何れかとらぬ薩摩武士天地も崩るゞかりなり裂るためしのわらばとて城の中なる官軍は死を視る歸する如くにて進みすゝんで防戰す蔑士の城の降りしはそれにはあらで城中は睢陽城の張巡か下兵卒に至るまで一心不亂に防戰す錦の御旗ひるがへしされども城の連絡は翼あければ通ひ得ず音信する由あかりけり國の爲とて健氣にも單身劍を提さげて蟻のはひ出る隙もなき都の軍に身を投じ語りつ問ひつ示しあひ爰に始めて連絡の池中の魚も時を得て進め〳〵の號令に西北南東なる空前絶後の功を立て我日の本の益良雄を譽め美まぬものぞなき城を出でつゝ夜に乘じ賊囲の中を潛り出で城の中なる有樣を賊兵原を打破り解けて嬉しき厚氷り跳る心の活潑地萬銃天地に鳴り響き囲の賊をうち攘ひ名を揚げ父母を顯せし譽め美まぬ者ぞなき

○日本魂

日本魂其は何ぞ外國人の侮りを是ぞ日本の心なる日本魂其は何ぞ慷む人迚も諸共に寄せ來る敵を打拂へ夢にも受る事はなし是ぞ日本の心なる筑紫の端や陸奥に偏へに盡す國の爲め

是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
如何なることの有り迚も
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
力の有ん限りには
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
國に無學の跡を絶ち
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
家の富めるも貧しきも
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
道ある者と交るに
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
信を盡す其の爲めに
是ぞ日本の心なる
割れば亡び合へば立ち
心合して割れざらむ
是ぞ日本の心なる
人々勉め怠らず
國を開きて利を興す
是ぞ日本の心なる
學びの道を盛りにし
智識を以て名を揚る
是ぞ日本の心なる
尊き人も卑人も
相親しみて僻なし
是ぞ日本の心なる
外國人を侮らず
彼と是との隔てなし
是ぞ日本の心なる
忠義の心堅く取り
身をゞ棄てゝも動かじと

是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
正しき道の刃にて
是ぞ日本の心なる
日本魂其は何ぞ
慈悲の心を擴ろめ
是ぞ日本の心なる

○凱戰の歌

柳櫻をこき交ぜし
吹き醸へる日章旗の
欣び迎ふ國民の
歩兵騎兵の肅々と

○

勇む喇叭の聲々を
いさむ兵士にいさむ駒
旗も勇めは大筒も
勇み〳〵し兵士や

○

是ぞ日本の心なる
弱を扶けて强を撃ち
無理非道をば滅ぼさむ
是ぞ日本の心なる
幸なき者を憐みて
禽獸にまで及ぼさむ
是ぞ日本の心なる

都の春の朝風に
今日凱戰の我軍を
見渡すはるか彼方より
喇叭の聲の勇ましゝ
聞く國民は氣もいさむ
凱歌も聲も勇むなり
小筒とゝもに勇むなり
喇叭の聲も勇ましゝ

勇む兵士も戰場に
霰ふる日も雨の夜も
火玉飛び來るそが中も
爲と思はばいとゞおほ

○

あゝ勇ましの兵士や
修羅の巷に出入し
銃と名譽を擔ひつゝ
柳櫻もうらゝかに

○軍旗の歌

第一

二千五百年以來
その國守る軍人よ
我大君の御標ぞ
いかなる敵をも打攘へ
地球の上に輝かせ
忠と勇とに此旗を

第二

わりし辛苦は幾何ぞ
氷の刃鉄の
何にか厭はん大君の
喇叭の聲も勇ましゝ
國と君とのそが爲に
萬死の中に生を得て
歸る都の春景色
喇叭の聲の勇しゝ
光り輝く日本國
汝の仰ぐ大旗は
君の御言をかしこみて
忠と勇とに此旗を
いかなる寇をも打攘へ
地球の上に輝かせ

昇る旭日ともろともに
汝を援け玉ふべし
此八洲國の中あらで
神功皇后豐太閤
忠と勇とに此旗を

第三

四方海ある日本國
末頼母敷金城は
翼の猛き鷹迚も
我皇國に寇を爲す
雷なせる大砲と
いかなる敵をも打攘へ
地球の上に輝かせ

第四

皇國の靈と軍人が
昔は弓矢鎗刀
汝の帶べる銃劍は
揮ふべき時揮ひつゝ
代々の皇の神々は
汝の功を立る場は
外つ國々に在りとして
昔しの功績想べし
地球の上に輝かせ
砲臺よりも艦よりも
汝等忠義の軍人ぞ
爪牙鋭き獅子迚も
兒者共のあるならば
電光あざむくつるぎもて
忠と勇とに此旗を
用ゐる利器は何物ぞ
今は銃砲軍艦よ
大和魂ある人の
鷲をも獅子をも打攘へ

此大御旗揺し立てゝ

第五

我大君の御標と
益す光り輝きて
吾々陸海軍人の
祝ひ唱へて悦びて
烈しき軍すみし時
益す〳〵ひかり煌きて
御稜威は世界に響くらん

○扶桑歌

天皇尊の統御しる
一代の如く神ながら
猛く雄〻しく平らけく
其大稜威朝宵に
仕へ奉ふ人民は
一つ心に集めへて
然れこそ世に我國を
いかなる敵をも打攘へ
國の光りと建る旗
あだを平げ民を撫で
功績譽めて諸人が
榮譽は限なかるべし
國の光りと此旗は
萬世不朽の帝國の
御稜威は世界に響くらん

○王政復古の歌

我日本い千五百代も
治め給へば大御稜威
豊かに安く在りとかや
あやに畏み安國と
彌や増す増すに眞心を
我日本を護りける
浦安國と稱へれ
王政復古のそのかみを
三とせの冬の十二月
みやこの空ゐたちかへる
世はかりでもと亂れつゝ
鞍馬にひゞくときの聲
星のくらゐも三臺の
あかつき暗き鳥羽伏見
錦の御旗ひるがへし
勇氣いやますすらをが
轟きわたる修羅の道
ちしほに染るもみぢばの
仆れかさなるしかばねは
踏しだきゆく戰場の
驚すつるきのつかの間も
道のはてゝそゐはれなれ
炎さかまく淀の城
煙のすゑのかげろふも
のどけき春にうちまとゐ
おもへば凄し慶應の
九日の日をはじめにて
春のひかりもぬばたまの
あやめも見かぬすみ染の
よろひの袖にかゝやくや
影うすれもくさしぐしの
大内山のやまかせに
大將軍のいでましに
いくさよばひも雷と
斬りつ斬られつ阿毘叫喚
赤きこゝろをとりぐに
獻か身方か白雪を
習ひ常おきつゆの身と
君をわすれぬものゝふの
天地もうごく震動に
おほへる雲のたちまちに
きゑて治る君が代の
昔しがたりとすぎし世を

かたりつゝ酌む盃に
このうたげこそ樂しけれ

老たるかげもかつ見もる

○カムプベル氏英國海軍の歌

第一

イギリス國の海岸を
一千年のその間
戰爭のみか嵐をも
敵を受くともたゆみなく
軍烈しくあらばあれ

固く守れる水兵よ
汝が建つる大旗は
支へ得たれば此後も
勇氣の限りひるがへせ
嵐も強く吹ば吹け

第二

立ち來る海の浪間より
汝を援けたまふべし
其甲板えてがらの場
大子ルソンやブレーキの
軍烈しくあらばあれ

汝が祖先あらされて
蓋し祖先の軍艦の
大海原は其墓場
死にし所は人しのぶ
嵐も強く吹かゞ吹け

第三

四方海おるブリタニヤ
山とたちくる波とても

とりでも城も用はなし
千尋のそこの淵とても

慣て我家に異ならず
船より放ち轟かし
軍烈しくあらばあれ

第四

國の光とたてし旗
危難も都て解け去りて
其時汝つともゝ
歌に唱ひて悅びて
烈しき軍すみし時

いろづちおせる大砲を
波をわけつゝ進み行く
嵐も強く吹このば吹け

益々光り輝きて
大平の日にもどるらん
いさはし譽て諸人が
安樂限りなかるらん
強き嵐のやみし時

○テニソン氏輕騎隊進擊の歌

第一

一里半なり一里半
死地ゑ乘り入る六百騎
士卒たる身の身を以て
答をなすも分ならず
死ぬるの外はあらざらん

第二

右を望めば大筒ぞ
前も左りも又筒ぞ

第一

一里半なり一里半
死地ゑ乘り入る六百騎
士卒たる身の身を以て
答をなすも分ならず
死ぬるの外はあらざらん

第二

右を望めば大筒ぞ

弁びて進む一里半
將は掛れの命下す
譯を糾は分ならず
これ命これに從ひて
死地に乘り入る六百騎

共に打出す砲聲は
響の如く凄まじや
猛り立てゞ進むある
勇で乗り入る六百騎

第三

抜ば玉ちるやいばをば
きら〳〵と輝けり
大砲方をあで切りす
烟の中に飛込みて
太刀の早業見事あり
遂にさゝふる事ならず
馬の頭ぞ立直す
殘るはいとゞわづかあり

第四

右を望めば大筒ぞ
共に打出す砲聲は
彈丸雨飛の其中に
死地より出て乗りかへす
天に轟くいかづちの
彈丸雨飛の間にも
死地にこそ入れ鰐の口
皆もろ共に振あげて
敵陣近く乗り掛けて
最と目冷しき働きぞ
烈しく陣を破るなり
敵の軍勢たぢ〳〵と
むら〳〵ぱつとむら崩れ
以前に進みし六百騎
左りも後も又筒ぞ
天に轟くいかつちぞ
縱横ひとんに切り靡く
鰐の口より脱れ出で
歸るは元の一里半
殘るはいとゞわづかなり

第五

あゝ勇ましきものゝふの
手柄は永く傳へなん
とる年あまた重りて
頭に霜を戴きて
六百人の豪傑が
そのふる事を語らふて
六百人の其中で
世に香しき其譽
今のをさなご生立ちて
屢は梓の弓となり
孫ひこやしやで多き時
敵の陣へと乗り入れる
末代までも名は朽じ

○楠公櫻井驛に正行へ遺訓の歌

建武の昔し正成は
是は一藏都攻の有りし時
之を汝に讓るなり
世は尊氏の世となりて
鏡にかけて見る如し
父の子なれば流石にも
弓張月の影暗く
打濁されし郎等を

肌の守りを取り出し
下し給ひし綸旨なり
我れ兎に角になるならば
叡慮を惱し奉らんは
さは去り乍ら正行よ
忠義の道はかねて知る
家名を汚すこと勿れ
あはれみ扶助し隱家の

吉野の山の奥深く
流れも清き菊水の
敵を千里に退けて
嗚呼、叡慮を安んし奉れ

○小楠公を詠ずるの歌

嗚呼、正成よ正成よ
黒雲四方にふさがりて
悪魔は天下を横行し
あおぎり果て上とせず
絶る間のなき戰に
芳野の山に花見んと
君が御代こそ千代〳〵と
いづれの時にあるあるや
嗚呼、大君の御爲に
この世の塵を拂はんと
遠くあなたを見わたせば
雲の上まで屹立し
見もる菊水の其旗は
月の桂い進や
旗を再び飜し
叡慮を慰め奉れ

公の逝去のこのかたは
月日も爲めに光おく
下を虐げ上をさへ
吹き來る風はなまぐさく
春は來れども花咲かず
訪ひ來る人は絶てなく
囀る鳥の聲聞は
あげかはしきの至りおり
振ひ起りてけがれたる
する人とてあらざるか
金剛山は巍峨として
繁る林の木の間より
實にこそ國の寶おり

父の賜ひしこの刀
賊の頭を斬らむ爲
國の仇なり父のあだ
攘へば來たる夏の蠅
熟ら思ひめぐらせば
若しも病に冐されて
不忠不孝と誹られむ
死出のなごりに今一度
君の御影を伏し拜み
聞て切おる胸のうち
書き殘したる梓弓
誓ひし者は百餘人
ものともせずに斬まくり
討死せしはいさぎよく
都も遠き村里の
忠臣孝子の鑑ぞと
天地と共に傳はらん

○正行吉野參内の歌

腹をきれとの爲おらず
悪さもにくし彼の賊等
斬て捨ずに置べきか
頃は正平戊子の春
元來よわき此からだ
空しく失する事あらば
討死するは此時ぞ
願かなへて親面たり
生て歸れのみてとのり
哀れといふも愚なり
引きてかへらぬ赤心を
雲霞の如き大軍を
君の方をば枕して
いさましかりし次第おり
女わらべに至まで
譽る其名は香しく
天地と共に傳はらん

正平四年正行は四條の隆資卿を經て先臣正成勤王の打滅ぼして先帝の其後天下又乱れ都をさして攻上り終に津の國兵庫なる戰死をこそは遂げたりき其時正行漸やくに軍の場へは伴はで敵を亡し我君の遺し訓へし言の葉は然るに正行今は早や今に及びて朝敵をいつをか待ん人の身は病の爲に死しもせば父の爲には不孝なりされば此度師直と芳野の皇居に參内し心の中をぞ奏しける軍を起し朝敵を叡慮を休め參らせし逆臣尊氏筑紫より正成覺悟や定めけん湊河にていさぎよく十一歳になりぬるを河内へ送り歸しつゝ御代にあせよと細々に今尚耳に留まれり年も壯となりぬれば打亡さで過しなば思ふに任せぬ習ひにて君の爲には不忠なり手痛き軍仕ら

彼が頭を正行が頭を彼に取らるゝか雌雄を定め申すべし今度の軍正行が今生にては今一度申しも敢へず涙をば義心氣色に見えたりき天子御簾を揭げさせ此程數度の戰に叡慮を慰するに足ぞかし父子累代の勳功は朕い汝を股肱とす國家の重きに任せよと正行頭を地に着て思ひ定めて退きぬ斯て一族郎黨と參りて御暇申し上げ名々名字書連ね手に打取るか正行が二つの中に戰ひの必死の覺悟に候へば龍顏拜ませ給はれと鎧の袖に注ぎつゝ近く召れて正行よ敵の勇氣を摧しは深く感ずる所あり必ず命を全ふし畏き詔ありければ是を最期の參内と後醍醐帝の御陵へ如意輪堂の壁板に又其奥に歸らじと

兼て思へば梓弓
記し留むと鏃もて
芳野を出て勇ましく

○擬二舞曲一歌

世は刈掃と乱れつゝ
蟬の小川に霧立ち
うら傷ましや玉さわる
寶美朝臣に季朝卿
其外錦小路どの
族にしわれば駒さへも
降しく雨の絶間おく
是より海山淺茅原
浪花の浦にたく塩の
行かんとすれば東山
朝ゐ夕ゐに聞ゐれし
なべて今宵は哀れゐり
拂ひ盡してもゝ敷の

○僧月照入水を悼む歌

おき人數ゐ入る名をば
一首の歌を書き殘し
四條繩手に向ひける
皆さす日もいとくらく
隔の雲とおりにけり
内裏に朝暮とのゐせし
壬生澤四條東久世
今うき草の定めなき
進み兼てぞ嘶へつゝ
涙に袖はぬれはてゝ
露霜わけて芦がちる
からき浮世は物かはと
峰の秋風身にしみて
妙法院の鐘の音は
いつしか暗き雲霧を
都の月をしめ給らん

花の都も秋はなは
名は流れたる清水や
秋の葉色の溝ごとに
乱れもく世の浪花江や
猶世の爲めに身をつくし
波影の岸の波ならぬ
色は變らぬ青柳の
たゝの橋をバ打渡り
萬代かけて君が世の
神に歩みを箱崎の
筆の主をよく問へば
御手をば下しませうつゝ
重ねくし白浪の
恨み浦半の片たそき
沾衣塚の沾ごろも
やがて博多の假住居
又行く方は薩摩潟
忍細くも都にて
夕べ淋しき風情なり
落ち來る鶴の乙羽山
散や紅葉のちりくと
蘆のさはりは繁くとも
盡さんとても筑紫潟
操をいつか深緑
驛路を越えて香椎潟
千代の松原千代かけて
千歳の松によそへつゝ
社にかけし四つの文字
延喜の帝畏しこくも
爰もむかしい石疊み
よせし昔しを忘れじと
かけて歎くも憐なり
吾身に着たる心地せり
こゝも浪風さわがしく
沖の小島にあらねども
誰かあはれと思ふらん

たよるは心筑紫潟
語ふ人もうき枕
せきとめられて又舟に
波にゆられて行く先は
頓て鹿兒島かごの島
又風に驚きて
日は神無月望の夜の
照り輝きて曇りなき
茲に一人の薩摩人
契りも深き船の沖
乘合人も船人も
さりとは知らぬ白浪の
猶東雲のあけ鴉

○西郷隆盛追慕の歌

夫れ達人は大觀す
榮枯は夢か幻ろしか
眞如の月の影清く
何を怒るやいかり猪の
一人の外に打あけて
野間の關屋のせき守に
乘るも夫れと寄りがたき
黑の瀨戸てふ名もうしや
翼さ縮めて潜みしが
日向を指して船出せし
傾く月と諸共に
身は大君の御爲とて
如何ぞる緣し先の世に
底の藻屑とおりぬるを
櫂の軍も露程も
立さわげども甲斐なき
なくより外はなかりけり
扨山蓋世の雄あるも
大隅山の狩倉に
無念無想を觀ずらん
俄にげきする數千騎

勇みに勇むはやり雄の
留りがたきぞ是非もなき
若殿原にむくいおん
諸手の軍打敗れ
霜の紅葉のくれおねの
薩摩猛雄のをたけびに
震たばしる如くにて
木魂に響くときの聲
落るが如き有樣を
あゝ勇ましの人々や
腕の力もためし見て
いざ諸共に塵の世を
唯一言を名殘にて
宗徒の輩もろともゝ
心の中ぞ勇ましゝ
昨日は陸軍大將と
類おかりし英雄も
山下露と消ねはてゝ
騎虎の勢ひ一徹に
唯身一つを打捨てゝ
明治十年秋の末
討ちつ討れつ頓て散る
血汐に染めぞ顧りみぬ
打散る玉は板屋うつ
面をむけん方ぞなき
百の雷ひと時に
隆盛打見てほゝぞ笑み
亥の年以來養ひし
心ゝ殘ることもなし
脫れ出でんは此時と
桐野村田を始とし
煙と消ねし大丈夫の
官軍此を望み見て
君の寵遇世の譽れ
今はあへなく岩崎の
移れば替る世の中の

無常を深く感ぜつゝ
唯悄然と隊をくみ
折しもあれや吹き下す
岩間に結ぶ谷水の
悲鳴するかと聞かされ

○東叡山懐古歌

其一

春風そよと吹く頃は
池の水際に萌え出る
左は去りながら夏も過き
唧く蟲の音露深けて
悲しかるらむ乙女子の

其二

見渡す涯り果もなく
靜かに見もる青空も
物哀れなる夕ぐれに
秋の日影も山の端に
響くやいかや山響の

無量の思ひ胸にみち
目と目を見合す計りなり
城山松の夕あらし
非情の色もあにとあく
戎服の袖を濡すらん

上野の山や不忍の
緑の小草薫るらむ
はや金風の吹く頃は
たとへ紅葉色添ふも
照る月影を忍ぶらむ

あらぶ梢の間より
風吹き出て雲動き
鳥は棲栖を急ぐある
入相告ぐる鐘の音も
最と憐れと聞ゆなり

其三

露を拂ひて亡き人の
夢に夢見る夢の迹
東叡山の戰を
涙ぞ先に忍ばるゝ
乱れて物を思ふなる

其四

血しほの躑躅咲きみだる
狹霧は深く垂れ籠めて
いり交りたる戰に
色めく味方勵まして
後へは退かぬ壯士が

其五

其戰場を奪られじと
味方に續く勢もあし
豫ての覺悟討死と
枕并べて打死す
曲がりし刀杖にして

跡吊ぶらへば夢の世に
明治戊辰のそのむかし
指折り數へ尋ぬれば
忍が岡のしのすゝき
心のうちぞ苦しける

五月中浣の雨催ひ
敵味方さへ分け兼ぬる
旗風あび浮足の
太刀のはがねの續くまで
此處を詮度と守るあり

骸を曝らし戰ふも
捕へられてい生耻ぞ
死を恐れざる武士が
敵も味方も諸共に
同じ方向の死出の旅

其六

峯の嵐や梢ふく
艸の葉末の白露と
何とこたへも亡骸や
流轉の巷煩惱の
何處如何なる處にか
無常の風に誘はれて
消ゆにし人の迹とへば
闇路に迷ふ亡魂は
海に沈みて今頃は
仮の宿りを定めけむ

其七

古き松杉影暗く
東叡山も今ハ早
枝を交へて生茂る
腸斷る秋の空
尸を瘞む墳土に
散り布く落葉道もあく
角飲け石の苔衣
拂へど尽きぬ涙まそ
昔を忍ぶ涙なれ
亡き人傷む涙あれ

○ブルウムフヰールド氏兵士歸鄉の歌

涼しき風に吹かれつゝ
椅子にもたれて在さまは
その坐をしめし腰掛の
よそぢの昔荒くと
猶あり〳〵とみもるあり
ありし昔の我父の
實に心地克くありにける
堅く作れる臂掛に
刻みのこせる我名前
柱に掛けし古時計
元にかはらぬ其音色
滿る思は猶切に
忘れんとして忘られず
後に掛けし古畧暦
ひら〳〵と誘はれて
嵐に逢ふて飜へる
一枚づゝに又下へ
數も合せて二十年
暮せる年の數取りぞ
來る一羽の知更鳥は
我をつら〳〵不審顔
はにかむ如く見ゐにけり
嗚呼老いたりや老にけり
昔の友にあらぬかと
斯く心中に彼是と
眺めにながめつく〴〵と
聞きて轟く我胸に
はりさく如く堪がたし
嗟歎に堪へぬ其時に
忽ち寄するそよ風に
上るは是ぞ陣前に
小幡とこそは見もるあれ
下りて落るその紙の
故鄉をはなれ遠國に
折しも家の入口へ
人に狎れたる鳥なれど
怖づるが如く且つは又
口に云はねどそのふりは
それに在はする武士は
尋ぬる樣に見ゐにけり
物を思へる其間
窓の限に織なせる
綠の色の青〳〵と
又と類はあらぬくに
其美さあてやかさ

是も誰がわざ稚子の
敷て楽むものありと
思ひは更にいやまさり
年をも日をも打忘れ
わつと計に啼にけり
わゝ我ながら愚まし
過ぎ越し方をさまゞに
辱しく又口惜しく
軍の神をのゝしれり
可惜勇士の失せぬるを
殺傷放火分捕の
今更思ひめぐらせば
我身を守るたからぞと
我身の罪をかさねたる
恨はいとゞいやまされ
二人の影ぞ見ゆるある
あらしの老と見うけたれ
計らぜめぐり逢ふ坂や
あした夕べの手すさみに
推量すればいとゞなほ
胸はそゞろに塞りて
前後も知らず立上り
稍時ありて心付き
再び椅子につくゞと
思ひつゞけて按すれば
思はず髪も逆立ちて
名譽の淵に落ち入りて
實に傷敷き事ぞかし
其有様をつらゝと
あら恐ろしやひたらし
頼みたのめる劍こそ
仇と思へばおほさらに
聲する方をうちみれば
此影こそは稚子と
やがて入り來る我父は
我子の顔を一目見て
せきくる涙せきあへず
嬉し泣きにぞ泣きにける
目元涼しき小女子に
これナンセーと手を取て
こゝに居やるは漸々と
汝の伯父のチヤーレぞと
しらをの如き指をあげ
そと打彈きぐわんせおく
嗚呼我ながら愚おり
繰返へすこそ無益なれ
此老卒ぞ幸多く
心に掛る雲もおし

○シエークスピア氏ハムレツト中の一段

ながらふべきか但し又
愛が思案のしどころぞ
これに堪ふるが大丈夫か
深き遺恨に手向ふて
どうも心に落ちつかぬ
我を抱きて老の身の
そが傍に行める
腰打屈め老人は
口を合はすもわまる愛

イスパニヤより歸國せる

云へは女は近寄りて
いとゞ曇れる老の眼を
笑ふ姿は可愛ゆらし
身の上ばなし斯く長く
それに付きても兎に角に
浮世の中に今はまた

おがらふべきに非るか
運命いかにつたなきも
又さはあらす海よりも
之を晴らすがものゝふか
扨も死なんか死ぬるのは

眠ると同じ眠る間は
あらゆるうきめ打捨つる
アヽしぬねむるねむる時
ハアこだわりが有樣ぢや
無常の風にさそはれて
いかゐる夢の來るやら
うき事長く忍ぶのは
九寸五分さへもちたれば
事をすますもやすけれど
强者の非道世のそしり
想ふ美人の不深切
貴人の無禮又たとひ
輕しめらるゝ是をこれ
重荷を負ひて汗流し
暮せぬ暮し暮すのも
死後の恐がゐるからぢや
登りて歸る人ぞおき
物すごくこそ思はるれ

心痛のみか肉体の
是ぞ望のはてならん
萬が一もめみるならば
おせと曰ふに死に眠り
此娑婆離れしまふとも
ハテ疑の晴れぬもの
これが爲かや何故なれば
その切先でひとつきに
之をば爲さず慎みて
驕れる人のはづかしめ
緩みもぎたる國の法
いかに善しとも下人の
地へ忍ぶのは何故ぞ
艱難辛酸こらへつゝ
亦何故ぞ是はみな
死出の山路の不思議なる
如何なる事のわるやらん
たとひ此世に止まりて

うきかんおんを聞るとも
斯くと心に思ふ故
いかなる深き大望も
實のおるとぞなかりける
アヽたをやかな其風情
乙しが罪障わびてたべ

○ホーヘンリンデンの戰爭の歌

日は早や西ふ入相の
ホーヘンリンデン村近き
流るゝ水ゝ物凄く
新に積る雪のとこ

鐘はかすかに聞ゆつゝ
イーザー河の音高く
凡て新手の兵は
餘念もおくぞ臥し居けり

○

只聞くものは村遠く
夜ゝいと爛けて見もる頃
すは事ありと大將は
暗きを照す明りをば

○

あの世の事は恐しや
たけき心も弱くおり
花を開かず枯れ失せて
左はさりおらオヒリヤよ
そおたは神をいのるおら

犬の長吠する聲ぞ
不意に打ち出す太鼓の音
墨おす空の冬の夜の
付けよくと命じけり

喇叭の聲や火把の
明によりて速かに

整頓したる騎馬武者は
手荒き馬は恐しく
預らんとや勇み立ち

○

名譽に充てる軍馬をば
音は怜ら雷の
震ひ崩れつ烏羽玉の
千々の電びかく〳〵と

○

秋の紅葉のそれあらで
ホー〳〵ンリンデン岡の上に
瀧つ瀬をかすイーザーの
殺伐悲愴の有様は

○

漸やく明る朝ぼらけ
鯨波を作りて突き進む
兵一文字に天ぎらふ
さし輝る旭兵は

玉ちる劍振き連れつ
身の毛もよだつ響應に
いとも雄々しく斷けり

敵の陣屋へ乘り入るゝ
轟く如く山岡も
暗夜に閃めく大炮は
まばゆき迄に光りけり

唐紅にまだらかす
輝る電はいや赤く
流るゝ音はいや高く
いと凄じく見ゆにけり

森を離るゝ雀色
猛烈敢死の兩軍を
八重柵雲を押し分ける
榮譽をこそい表しけり

○

燦たる軍旗おびかせつ
勇み乘り入る輕騎隊
古今無双の軍功を
兩軍既に入り雜り

○

名も世に高き佛軍が
男子と生れし甲斐もおし
流る血汐に此恥を
憤り激せる兵は

○

さしもにつよき墺軍も
如何で望を達すべき
降り積む雪ゝ兵の
踏躪かす芝泥は

○櫻の歌

我國なる武士の
朝日おにほふ山櫻

擊てよ進めの命令に
屍を塚にうづめんか
建てゝ名譽を博せんか
酣とこそ見られけり

不意に擊れし遺憾
いざ諸共に身を屠ふり
潔く雪いで吳れんずと
勝利の程ぞ預知けり

死を定めたる負傷猪
却て敵に逆擊たれ
からだを纏ふ衣ぞや
長く睡らん墓場なり

大和心を人問はゞ
咲くや霞も九重の

左近の花に風吹かば
梁とり直し守るべし
其色其香たへあるも
花散る事はあきぞかし
聖帝の大御代と
櫻花こそ愛たけれ
夜る行宮にしのび入り
赤き心を墨染の
世にも稀なる忠烈は
去れば今尚武士が
三郎如き忠臣を
帝に仇する者あるか
忠義の劍ふりかざし
國平らけく安らけく
廣に世界に畑かし
千萬春を迎へんと
我武士の忠烈は
櫻と共に例あし

守れや〳〵武士よ
櫻は忠義の花なるぞ
浮薄の風にさそはれて
千春万春動かざる
共に世界に例しあき
昔し兒島の三郎は
十字の詩をも作りあし
花と其香を競ひける
鬼神とても泣かんめり
花見るたびに古の
美みしたひ慷慨し
國に敵する者あらば
只一打にきり倒し
聖帝の御威德を
櫻の花ともろともに
やたけ心のいや勝る
櫻と共に例あし

○ロングフェルロー氏人生の詩

そも靈魂の眠るのは
人の一生夢なりと
眠らにや夢は見ぬものぞ
夢と思へどさにあらず

○

人の一生夢あらず
人の終は墓なくも
土より來り又土に
そりや靈魂の事あらず

○

此世に在りて樂むも
世にある趣意に非ざらん
日毎〳〵に怠たらず
功を立ねばあらぬぞよ

○

光陰實に箭の如く
心は如何に猛く共
最どたしかなる事ぞかし
墓にうづまるものあらず
歸ると云ふは肉体ぞ

又苦しむも固と人の
生るは役に立つ爲ぞ
今日は今日だけ一日の
營道いとも易からず
墓なく進む葬禮の

送葬太鼓打つ胸は
最とも哀にひゞくらん

○

此世の中は戰爭ぞ
人に生れた甲斐もなく
あもむ羊や牛たるな
功名手柄あすべきぞ

○

如何に樂しくおもふ共
如何にうれしくありつ共
働くべきは現在ぞ
胸の心と天の神

○

豪傑輩の一生を
生て甲斐なきものならず
稀なる譽得るならば
永く傳へて殘るらん

○

音止めされたる太鼓の音
其戰爭の中ゐ居て
人に使はれ追はれつゝ
人に劣らず憤發し

未來はあてにすべからず
過去はむかしに過ぎし事
其の働を見る者は
つら〳〵思ひめぐらせば
人に勝りし手柄して
名は香しく後の世に

其香しき名を聞かば
艱苦辛苦を浪風に
助け船さへわらぬ身の
功名遂ぐる者あらん

○

されば人々忘たるな
運命如何につたなきも
たゆまず止まず自若とし
勤め働くことをせよ

○グレー氏墳上感懷の詩

山々かすみいりあひの
徐に歩み歸りもく
やうやく去りて余ひとり

○

四方を望めば夕暮の
唯この時に聞ゆるは
遠き牧場のねやにつく

○

社會の海に乘り出して
吹き廻はされて破船して
氣を取り直し憤發し
昔時も猶豫するなかれ
心を落すことなかれ
功名手柄なしつゝも

○

鐘はかりつゝ野の牛は
耕す人もうちつかれ
たそがれ時に殘りける
景色はいとゞ物寂し
飛ひ來る蟲の羽の音
羊の鈴のなる響

猶其外に常春藤しげき
近よる人をすかし見て
訴へんとや月になく

○

かしこにゝ楡又こゝに
其下かげにうづだかく
壙に埋もれてこの村の
塔にやどれるふくろふの
我巣に寇をなすものと
いとあはれにも聲すなり

○

のきの燕もにはとりも
わさぼちげにぞ成ぬれば
冥土の人の眠をば
あらゝぎの木ぞ生茂る
苔むす土の覆ひたる
古人長く打眠る

○

死にたる人のはかなさよ
妻のよおべも誰が爲ぞ
爺の歸りをよろこびて
木魂に響く角笛も
喧すしくはありつれど
覺すとこそなかりけり

○

曾てこの世に居し時は
山もはたけも其くゝに
身を焼むる爐火も
愛るわらべがかたことに
小膝にすがることもおし
麥も小麥も其鎌に
手荒き馬も其むちに
繋れる森も其斧に

○

功名とても浮雲の
この古人の世の益と
わびしき妻子の墓をも
過るが如きものあれば
骨折するも不運をも
笑ふべきにはあらずかし

○

富貴門閥のみあらず
浮世の榮利多けれど
草葉の露もおろかあり
みめ美しきをとめでも
いつか無常の風吹かば
黄泉に入るの外ぞなき

○

苔にうもれし古人は
わたりまばもき屋の内に
樂器の音を聞すとも
墓場の上に寺をたて
頌歌の聲に合すなる
身の不德とぞ思ひぞよ

○

ひつき肖像美を盡し
ひとたび絶ぬし玉の緒を
へつらふ人のほめ言も
人の尊敬多くとも
つおぎとむべき術はおし
長き眠は覺すまじ

考へみれば廢れたる
世にすぐれたる量ありて
詩文の才も多けれど

○

學びの海は廣けれど
心の性は賢きも
世に譽れをば聞かずして

○

深き水底求むれば
高き峯をば尋ぬれば
千代の八千代の昔しより

○

實に此墓に埋もれて
詩は拙くもミルトンに
クロムエルにも比ぶべき

○

議院の議士を服さしめ
國の安危を身に委ね
此古墳の古人も
國を治むる德を具し
あらはれずして失けるが

○

渡る船路を知らざれば
身は賤しくて貧なれば
空しく鄙に終りけり

○

輝く珠も有ぞかし
呑る木草の多けれど
人に知られて過にけり

○

業はかとるもハムデンに
國に軍を擧ずとも
人のかばねやあるならん

○

人のかぞしも外に見る
高き聲望を民に得る
數等の事はかしるべて

○

惡はひろく及ばねど
不德もいとゝ少なしや
民をなやめて利をあみす

○

まことをかくすそら言に
且つ巧なる詩文もて
是は都の弊なれど

○

此處に生れてこゝに死に
其身は淨き蓮の花
實に厭ふべき世の塵の

○

されど收めしおきがらの
建し石碑は今もあり
醜しとてもたび人の

○

古人何ぞわづからん
又常々のふるまひに
人を殺して王となり
夢にも見ましさるとは

恥を忍ぶる心の苦
富貴に媚る世の習
未だ此地に及ばざず

都の春を知らざれば
思ひは澄める秋の月
心に染みしことぞなき

しるしの篤と側近く
文は拙く彫りざまは
憐を爭でひかざらん

碑面にゑれる名に年齢に
紀念の功は有ぞかし
文句を引きてゑりたるは

○

蓋し此世に生れ來て
別れの惜しき事もなく
心の外に打捨てゝ

○

眼の光り止むときは
たましひ体を去るときは
たとひ燒くとも埋むとも

○

偖又此に古人の
いつか歸らぬ旅に立ち
如何せしやと思ひやり

○

しからん時は此さとの
老人翁くゞ曰ふからん

記しに文字は拙くも
又有がたき經文の
人に無常を諭す爲め
程なく死ぬる其時に
浮世の花の榮をば
去り行く人はなかるべし
戀しかるらん身のやから
いたく慕はん妻子ども
人の思ひは消ねせじ
いはれは書けど余とても
過ぎ行く後は世の人の
尋るともあるならん
頭に霜を重ねたる
我儕は彼れが朝早く

昇る想を見ばやとて

○

又彼處なる川ばたの
わだかまりたる根の側に
流るゝ水に打臨み

○

又彼處なる常盤木の
かしら傾けうでを組み
とゝかぬ戀の口惜しさ

○

さるにひと日は彼の人を
絶て見るとおかりけり
野にも森にも川邊にも

○

又其のつぎの朝ぼらけ
まさしく彼れの爲なりき
彼の山壇の陰にある
岡に登るを常に見き
枝のび垂し山毛欅の木の
身を横たへて畫いてひ
其常おきをかこちけん
木立の下にさまよひて
知る人おさの歎かしさ
世のうさなどを嘆ちけん
慣れし岡にも樹陰にも
其翌朝になりぬれど
身をば現はすことぞおき
屍送る歌きければ
君は字を知る人あれば
碑文を讀みて知り給へ

土に枕しこの下に
富貴名利もまだ知らず
われ此世を打捨て

○

仁惠深き人なれば
憂き人見れば涙ぐむ
ひとりの友のわりしとき

○

これより外に此人の
尋るとても詮はなし
後の望みをいだきつゝ

○自由の歌

天にハ自由の鬼となり
自由よ自由、やよ自由
天地自然の約束ぞ
此世のわらん限りまで
いかにぞ仇に破るべき
月に村雲花に風

身をかくしたる若人は
學びの道も暗けれど
あの世の人となりにけり

天も憫み報いけり
外に詮すべなき故に
外に望みはなかるらん

善し惡し共に尙深く
たましひ既に天に歸し
神にまぢかく侍るなり

地には自由の人たらん
汝と我のその中ハ
千代も八千代も末かけて
二人が中のやくそくを
さは去ながら世の中は
まゝにならぬは人の身ぞ

話せば長いとながら
その人民を自由にし
數多の人のうき苦勞
我權勢を張らんとて
企てたりしシーザルは
議院の中に殺されぬ
民を奴隷になさんより
我の羅馬を愛するは
羅馬の民の望みなら
捨る命はいと易し
自由を壓制なさんとて
邪道はいかに正道に
民のいかりは火の如く
岩をも碎く勢ひに
黃金をかざす冠は
裏れ墓なくありけるは
自業自得と言べけれ
同じ車の一ッ轍

古し羅馬の國と聞く
共和の政治を立んため
それをも知らで慾のため
再び帝位に昇らんと
その親友の手にかゝり
その親友のいふことに
寧ろセザルを殺さばや
親友よりも甚し
我身も茲に諸共に
佛蘭西國のルイス帝
種々に手段を廻せど
打ちかつとのなるべきぞ
又洪水の溢れ來て
いと畏くも帝王の
斷頭機械の上に落ち
誰を怨みん壓制の
英吉利國の革命も
昨日の王ハ今日の賊

コロンウエルが手に持し
天をも回らす計りにて
自由の基を立てたりき
もと英國の民なれど
自由の人とありたさに
深山荊棘はまだ愚か
わを海原を打ち渡り
殖民なせし心根い
然るに猶も英吉利の
暴君汚吏の壓制ゐ
義兵を擧ぐると聞からに
死ぬる覺悟で七年の
遂に敵をば追ひ拂ひ
ワシントンの名に負へる
國のはまれや勇ましゝ
自由の爲には昔より
又死にわかれするものを
土地に鬚りはあるなれど
自由の旗の招きには
ヤーレス王を誅戮し
北亞米利加の合衆國
其發端をたづぬれば
故郷の名殘に氣を止めず
人のふみてしともなき
見も知もせぬ亞米利加へ
いかにわはれと思ふらめ
はだしの綱は離られず
詰り詰りて國の爲め
我後れじと親も子も
長の月日の攻め守り
目出度立てし獨立に
都と共に榮ゆもく
嗚呼彼と云ひこれと云ひ
數多の人の生き別れ
我東洋の人ぢやとて
なぜか心にかわるべき
人の自由といふものは
つとめよ勵め諸人よ
余此文をかきをはる
眠りをさます鐘の音の

○チヤールス、キングスレー氏の悲歌

無常を告ぐる人相の
三人の漁父は帆を上げて
走らす船は進めども
心の中は皆同じ
沖に向ひて行める
まうけは薄く子澤山
洲に打掛る涙音の
かせがにやあらぬ男の身
天地自然の道なるぞ
身屈の民と云るゝあ
時しも春の夢枕
いとゞさやかに聞えける
鐘の音するたそがれに
入る日をさして西方に
妻子の爲に引かさるゝ
父の出船を眺めつゝ
童子は外に餘念なし
雨の降る日も風の夜も
最とすさまじき其時も
袖のひぬのは女の身

○

三人の漁父の妻三人
鐘もほのかに聞ゆれば
火を挑げんと立寄りて
窓の戸開けて眺むれば
日も西山に入相の
共に籠りし燈臺の
つまめる心の夫思ひ
驟雨やら暴風やら

空打過るむら雲は
暴風は如何に吹けばとて
淵に打掛る浪音は
かせがにやあらぬ男の身

○

朝日かゝやく砂礫わ
殘るは三つの屍ぞ
歸らぬ旅に門出して
髪振り亂し取りすがり
目もあてられぬ風情あり
袖のひぬのは女子の身
一ト日も早く樂をせん
寄せ來る涙のくだけつゝ

○高僧ウルゼーの詩

おさらばさらば卒さらば
榮譽に永く別るべし
利運の端を芽出しおば
位にくらゐ重ありて
色黑〳〵と物そゞし
水嵩は如何に增せばとて
如何程すゞく聞けど述
袖のひぬのは女子の身
潮引き去りて其跡に
三人の漁父の妻三人
歸らぬ夫のあきがらに
消る計りに泣入て
かせがにやならぬ男の身
一ト日も早く世を去らば
屍の跡の砂礫に
鳴たきや鳴れよゐゝ儘と
再び會はぬ暇乞ひ
人の習は皆都て
八重咲きにほふ盛花り
榮曜榮華を極むれば
愚か胸に思ふ樣
天にも登る龍ありと
冬やゝ深く置く霜の
根までを枯らす霜枯に
見るも愍れな有樣は
永の年月心あく
浮袋にてうか〳〵と
丈の立たざる淵に入り
こらへおふせず張り裂て
忠を盡して年寄れる
身の零落に涙川
浮世の虛飾や譽れ程
今に至りて我が胸に
廣き世界の其内で
此世を渡る男ほど
願ふ所は其笑顏
彼と是との氣がねして
軍するより尙ほ多し

運命强よく願かおひ
悅びいさむおろかさよ
情け用捨も荒野原
運極はまりて身の墮落
我が今日の身の上ぞ
名譽の海に浮べるは
游ぐ童子に異あらず
飽まで强き我が意地も
勞れいでたる精神に
其の甲斐もなく今ハはや
水屑とぞそは成るべけれ
忌むべき物はあらずかし
初めて悟る所なり
王者の機嫌取り〳〵に
憐むべきは無きぞかし
恐るゝ所は其不興
憂さ恐怖さの數々は
女子の機嫌取るに增す

逆に零落する時は
再び浮ぶ瀬はあらず

○シヤール、ドレアン氏春の詩

春の景色のゝどけさを
冬は物事さびしきも
とけて樂み限りなし
人をなやますとぞなき

○

北風强く吹く冬は
雨もこほりていと寒く
爐火近く圍居して
されど嵐も雪も歌ひ

○

雲りがちなる冬の空
されど春にもありぬれば
光りのどけき天を見る
跡も殘らず消らせぬ

○テニソン氏船將の詩

天より落るルシフアなり
暴威を以て下を馭す
天地も容れぬ罪なるに
阿鼻の地獄も及ばじな
嗜まんものゝあるなれば
其身を深くいましめよ
將たる船の乘組は
英吉國の人なれば
其船將の壓抑を
將の性質猛くして
無さのみならず針はどの
免すことなし斯て世に
船人どもの心中に
消るひまなくなか〳〵に
人をも身をも諸共に
船將常に望むらく
わが船の名を轟かし
千萬人に呼ばれんと
湊に過り岡に沿ひ

野邊には深雪木はつらゝ
障子ふすまを建回はし
ねぐらの鳥に異ならず
のどけき春の來る時は

日影もうすく晝くらし
喜ばしくも雲はれて
いぶせく降りし雪霜は
のどけき春の來る時は

人は此世の鬼なるぞ
其過ちの深きこと
若しや今しも壓制を
わが此歌をよく聽て
曾て雄々しき武士の
自由の空氣吸ひなれし
勇のみならず信あれど
深く怨みて措かずとよ
慈愛の心露ほども
罪も嚴しく糺し問ひ
將が暴威はいやつのり
燃る怒のそのほのほ
機さへあらば燃え出でゝ
燒かんとすあり然れども
いつか勳功あらはして
今古未曾有の英雄と
一途にこゝろ傾けて
岬を廻り島を歷て

北に南に何處とおく
大海原の眞中にて
帆を打揚げて來る船は
軍の船にかぎれなき
喜び外にあらはれて
船人どもゝ銘々の
眼の中におのづから
將は聲色高らかゐ
一と號令を下すまゝ
敵にまぢか〳〵進みもく
常に怨みし大將を
大砲はなつものはなし
實にいかづちの落るごと
天地も破裂するばかり
帆架もわれて粉微塵
銃丸繁くふりきたり
甲板のみか帆柱も
生きとし生けるもの共は
殘るくまなくたゝ渡り
北をはるかに眺むれば
是ぞ正しく佛蘭西の
わが船將の面色は
言葉もいとゞいそがはし
心にたくみありければ
喜び色の見ゐたりと
ものども船を追ふべしと
風にまかせて我船は
こゝに乘組一同は
にらみて腕を叉きて
されど敵の大砲は
轟きわたるおそろしさ
横木も折れて波に落ち
甲板烈けて形なく
雨かあられか怖ろしや
人の腦やら血汐やら
右に左ようち倒れ

もの言ふともかゐねば
見合す姿凄まじく
絶ゑんとしつゝ船將を
嘲り笑ふ氣色あり
嬾みし人もことぐく
われを賣りしぞ口惜き
辱と恚のせりあひゐ
齒がみをなして叫べども
かばねの上に倒れけり
實に怖るべし惡むべし
失ひしこそとかゐけれ
經ぬとはいへど船將や
水屑となりて海底に
さりとも見ゐぬ波の上に
倒れしまゝに顏と顏
血汐の中に玉の緒の
見かへる眼おのづから
將は功名立てんとて
我を嘲りにらみつゝ
心のうちは堪へられぬ
顏色青く赤くあり
終に痛手の疵おひて
嗚呼壓制よ嗚呼暴威
數多の勇士いたづらに
其のち多く年月を
船人どものしかばねは
今も沈みも殘るらん
浮べる鷗二三四

○春夏秋冬の詩

春は物事よろこばし
庭の櫻や桃のとゐ
野邊の雲雀くいと高く
吹く風とても暖かし
げに美しく見もるかな
雲井遙かに舞ひて鳴く

○夏は木草の葉も茂り
夕暮かけて飛ぶ蟲は
人は我家を立出てゝ

○秋は尾花にをみなへし
晴れて雲なき青空に
されど何處も同じこと

○冬は雪霜いと深く
なさん爲とて爐火に
風は吹入る戸のあはひ

○四時
出でよ人々春の野に
菜種のとなも盛なり
浮れ遊ばぬものもなし
摘め〳〵董をとめ子等

○百日紅も咲きにけり
集り來る軒のきは
猶涼むらんさよふけて

桔梗の花も開くべし
照らす月影明かに
寂しく見ゆる家の外

冷もる手足を暖かく
近く團居をする時に
外の方見れば銀世界

れんげの花も盛りあり
うたふ黄鳥舞ふ蝴蝶
拔け〳〵茅牙うなゐ子等
あらおもしろの野遊びや

涼みに出でよ河原まで
月おもしろく照すなり
鼓打つよや河の水
散れ〳〵夜露我袖に

○行けや友達秋の野は
桔梗かるかや女郎花
人待顔に靡くなり
吹きな乱しぞ夕嵐

○ふれ〳〵小雪ふれ小雪
垣根の竹も撓むまで
翁や子ぞも花翁せ
銀の世界に成りにけり

○刺客を詠ずる歌
天を仰げばいと廣し
その中に住む人にして
狹き心のひとすぢに

風心地よく通ふなり
琴を彈くにや岡の松
暑は浪に流れけり
月をうつして翁さまし

今こそ盛り花盛り
萩もすゝきもたよ〳〵と
踏みおあらしぞ草苅等
明日も來て見ん此花を

向ふの松も隱るまで
拾へや子ぞも玉拾へ
あらおもしろの雪景色
なほ降れ小雪あすまでも

地見わたすも亦廣し
なぞか心の狹かりし
この人あらば世の爲に

ゆゝしき事や起らんと
やがて病にかこつけて
時は花散る春風の
それと言はねど父母よ
厚き恵も報い得ず
うからいらから友がきに
おもひ煩ひかき殘す
今日春雨のふる里を
頃も經ずして稻葉山
識る人とてはあがら川
尋ね問ふべきよしもがな
憎さもにくしかのかたき
下ある民をそゝのかし
上を崇むる人をしも
下にへつらひ民にこび
蘆摩の瀧戸に幾千々の
うたてくあれど君が爲
國のみいづを振はんと
思ひわびけん朝夕に
勉めしわざも打棄て
あでやの里に歸り來て
是ぞ此の世のおわかれよ
先だつ罪は免してよ
告んとすれどつげがてに
心は盡さずとる筆に
もはやたち出る旅ごろも
ふもとに着きぬ嬉しくも
思ふかたきにあふ瀬をば
とく揮まはしこの白刃
非ぬ望みを胸におき
上の掟を言わばき
訣ふものと謗れども
ねぢけいでたる彼等ども
人を沈めし涙風も
高麗もろこしも討鎮め
思ふ餘りの其の結局

憎むべしとも覺ゆれど
是れに引かへ彼のともは
彼の蠢けき佛蘭西の
首斬り臺に國王を
いと淺ましくふるまへる
口をひらけば鮮血もて
かゝる勢ひつのりあば
いで大君の御爲に
左はさりあがら彼の人の
つき從へるにせものゝ
とにもかくにも彼の人の
願ひかあへてまのあたり
心の中いいかありし
かくし持ちたる匕首を
待つとはさらに彼の人は
鼻高らかにしづ〻と
何故ありてかくすると
問ふは愚よ汝こそ
思ひかへせば可惜ひと
世の正道を乱さんと
血の波たちし禍津世の
ひきすゑたりし此時の
あとに心やとまりぬる
世を洗はんと叫ぶある
危かちまし大君は
斬り斃してん彼の人を
誠にかくも思へるか
妄にしかはいふあるか
心のそこを知らんとの
えんせつきゝし其時の
今は少しもゆるされじ
袖の裏にて拔き放し
神あらぬ身の思はねば
歸る跡より飛びつけば
言はせも果てず何故と
今將來の國賊と

閃く刃ほどばしる
此のますらをの眞心の
よしやうらみは遺るとも
ふみにしるして音高く
されど敵と見ひがめし
すくおきまでに篤かりき
國につくせるこゝろざし

○花月の歌

月と花とは昔より
誰が喜バぬ人やある
心につれて憂事の
足柄山の風すごく
これより遠く陸奥へ
死ぬか生るか白河の
勿來の關の春のくれ
都の空は花ぐもり
櫻の雲は將軍の
戟の枕に夜は慣れて
誰が樂まぬ人やある
然はさりおがら月花も
種とおれるも多からん
松風にそう簫の音も
いくさといへば身の末は
關をバ雲や隔つらん
駒をとゞめて眺むれば
鎧の袖に散りかゝる
鬢の霜より尙白し
秋のあはれも知ざれど
血しほも赤き心なる
貫かざるぞ怨みなる
なほきその名は世の人も
語りつぎおん千世までも
其の紳士は世にためし
君に忠なる志し

越路の山の月白く
故郷の空にかへるぞと
花の都はあれはてゝ
今宵一夜の宿頼む
滅亡爰にきはまりし
佞人ばらの讒により
二人ともおき賢臣は
御衣を捧げて涙なる
我君今は賊の爲め
無念の心やる瀬なく
我か赤心を申さんに
月の光りや花の香や
更に變りゝおきおるに
月を見て醉ひ花を見て
只一場の夢の間に
世のおり行ぞ無常なれ
上には君を煩はし
國の乱るゝその時ゝ
雲間を渡る鴈が音も
思へば我もおつかしゝ
何處が我身の置きどころ
櫻の露に袖ぬれて
平家の末ぞ悲しけれ
諫めの言葉容られず
筑紫の浦の詫居
心の底は如何ならん
遠き島路に幸き給ふ
十字をしるす櫻の木
抔か多言を要すべき
幾萬年を經るとても
常おきものは世の治乱
睡れる春の手枕の
うつれる興廢存亡の
若しも世運の拙なくて
下には民に苦勞させ
月の光はかゝやくも

花の色香は匂ふとも
されば世間の諸人よ
國の光りを東海の
國のほまれを三芳野の
するこそ今の勤めあり
樂しき月見して見たや

○擬レ悲二白頭翁一詩

都の錦桃さくら
移ろぬて行く乙女子が
露の命の果敢なさを
暮れ行く春に花散りて
眺め見わかぬ我心
花は今年に變らねど
常盤の松も杣人が
賤が伏屋の薪あり
青海原になりきてふ
過ふし春の曙に
今もてはやす諸人は
あど樂しみのあるべきぞ
今より眞心引起し
月よりも尚かゝやかし
花よりも尚香ばしく
誓ひて斯もおせし後
樂しき花見して見たや
花の色香の日にそへて
散り行く花を打眺め
嘆つもいとゝ哀れなり
木々の稍は緑しぬ
又來ん春を思ひやる
身の行末ぞ忍ばるゝ
斧にふるれば忽ちに
桑の畠も年ふりて
事さへ人の云ふぞかし
花見し人ぞ今はおき
行衛も知らぬ花の風

風を怨みて中々に
春毎に咲桃櫻
今年も去年に變らねど
今年は去年より古にたり
如何にわくらゝ言告ん
花の顏月の眉
哀れ翁にありにたり
幼けなかりし其日には
戯れ遊ふ舞の袖
光り輝く高樓に
樂しく暮す月と日の
昨日の淵を今日みれば
病の床にふし柴の
花の顏月の眉
緑の髪を今日見れば
頭は白く青柳の
過にし事を今更に
千々に物こそ悲しけれ
身の經り行くを思はざり
色も同じく香も同じ
變るは人の姿あり
又來ん春は如何あらん
我も昔しは汝が如き
今は頭に霜おきて
哀れ汝も亦心せよ
木の下影にうちむれて
風に散り行く花の色
天津乙女の歌ひして
流れぞ早き飛鳥川
瀬に變りもく我姿
戸ぼそを叩く人ぞおき
うつろひて行く世の習
越の國なる白山の
嶺は梓の弓なれや
思ひ出れば中々に
入相告る鐘の聲

塒に歸る　村雀

○春の眺望

春の景色を見渡せば
吹く春風の暖かさ
鳴く鳥の音の長閑さよ
袖を拂ひて人に媚び
我を招くの風情あり
最とい操を增す鏡み
人も興にや浮かれけん
或は菜の葉に戯れつ
見れば眼を喜ばし
西に東に耳に聞き
初音も緑も黄金なる
心を慰めざるはなし
愛づべきものは多けれど
眺めは爭で忘られん
詩にも歌にも巧みなる
得こそ寫さじ此狀は
げに常なきは世の習ひ
四方の野山の雪解て
咲く花の香の芳しさ
梅ハ笑を含みつゝ
柳は風に靡きつゝ
松は常盤の色變へで
雲雀も蝶も黄鳥も
木の間青空囀づりつ
野邊に藜の杖曳きつ
聞けば耳根樂まし
北に南に目に觸るゝ
錦の色も皆な共に
夏秋冬の眺めにも
別けて東風吹く春の日の
如何に書に畫に又文に
風流才子あればとて
左は言へ春ハ天地のみ
唯り占むべきものならず
何つ何れにて見らるべき

○送二學一友ノ歸一鄕一歌

五年六年諸ともに
互に勵みはげましつ
光りのどけき春の日や
五月雨晴れぬ夏の日も
いとゞ樂しく過しけり

○

月日の流れ早くして
昨日もろとも住みなれし
明日は旅路に出船の
かしまたち今祝ふあり
いざやはせ〳〵其酒を

○

歌へや舞へや皆共に
今日を限りぞ明日よりハ
敵といふは忌言葉
我身の春の來るときは
早く見まほし聞まほし

○

同じ學びの窓の内に
慰められつなぐさめつ
月かげ清き秋の夜や
雪ふりしきる冬の夜も
いとゞうれしく暮しけり

五年六年とく立ちて
學びの舍を出たりし
ともあり師ある君達の
祝の酒をすゝむあり
いざやくめ〳〵此酒を
舞へや歌へや諸共に
又逢ふ事の易きやは
雲をも排く心あらば

難きも難き事あらず
聲をば雲井に上るあるは

○

さはいへ心有明の
行衞思へばうたてやな
天と地との間をば
隔てはあらじ西東

○

同じ圍居の友人よ
浮世の事は何事も
さりとて心おくらすな
斯くして後に思ふ事
風ふき拂ふ雲間より

○

嗚呼面白の景色やあ
明日の別れのいとつらき
取れや人々酌む酒の
深き契りを忘るあよ

月の前もぐほとゝぎす
あれ見よ高く上るあるは

月影かくす村雲の
浮世の事に似たる哉
家となしつゝ過る身は
北も南もみな同じ

雲になやめる月を見よ
思ふまゝにはあらぬ共
耐へよ忍べよ怠るな
かなふ者とや見よや人
月は出にけりいでにけり

そゞろうき立つ思哉
愁を掃ふ玉はゝき
つきぬためしも有磯海
今宵ひと夜をあかし潟

月もろともにやすらはで

○夏夜卽事

晝のわつさい夕立に
かゞやく月に置わたす
玉を欺く玉だれの
いとも涼しきむら竹の
疑ふばかりおと細く
千ひらの金と一刻を
猶明け易き夏の夜の
口さがなくも愚かあも
蚤蚊や蠅と打つけに
おもひを焦す螢火や
しのぶ軒端の橘に
訪ふ人もなき草の戸を
物の哀れは夢にだに
靜に見れば四ッの時
われを慰め樂します
今日のあたり覺えたる

歌へや舞へや倒るまで

あらひ流して峰高く
千草の雪のはら〳〵と
小簾の返しに吹ちりて
葉越に秋や來ぬるかと
庭の筧もきこゆなり
惜みし春の宵よりも
價を誰かさだむべき
夏はうるさし又暑し
貶していふは云はずして
苦しの人の袖の香を
はつ音をもらす郭公
叩く水鷄にやぶらるゝ
しらで寐過す人ならん
うつり變りて物ごとに
深き方便をゆくりなく
其嬉しさと樂しさに

つゝむとすれば夏衣

○秋の夕

憂き世の塵は隔ねど
苔の通ひ路世離れて
松吹く嵐竹の雨
天津乙女や搔き鳴す
軒端にかゝる蜘蛛の
雲井の月に照り添へて
草の根ごとに夜もすがら
千草の花をあやおしや
萬有物を眺むれば
斯く面白き秋の夜も
夜は憂き物と歎ちつゝ
姑しほのめく稻妻の
思ひわびつゝ夕暗みに

○秋夜客舍

櫻さくてふ春過ぎて
茂り〳〵て其後は
吹返したる峯の松風
こまも車も音づれぬ
柴の戸扉ぞ住よかる
友あき宿を慰めて
琴の調と聞ゆなり
糸に貫らぬく白露は
玉の簾と見ゐにける
機織り虫の聲高し
明日は折てん唐錦
造化の妙ぞ知られける
衣かたしき獨りぬる
慰め兼ぬる人もあり
消ゐて跡なき世の中を
惑ひ渉るは憐れなり
夏の草木も生茂り
秋の嵐に吹き枯野
枯れて淋しき夜半の月
背負ふのりがね文傳ふ
永き言の葉故郷の
思ひまはせば七重八重
眺めて心涙持つ
蟲の音色も斷續に
響に旅の夢さめて
春の朝の花にまた
思ひ餘りてふるさとの
柴の戸あけて庭に出で
訪ふ者とてはあらぬ身の
我と影とのふたり連
誰にかつげん此うさを
空を眺めてまた寐屋に
つく〳〵聞けば軒端ふく
實に物うきは秋ぞかし

○湘南秋信

昨日けふと思ひしも

空に輝くさやけさを
傳ふる文はいと永く
音信とこそ知られけり
重なる雲ぞ故郷を
此うき思ひ誰しらん
聞ゐて憂きは鐘の聲
憂にうき來るうき思ひ
夏の涼の舟遊び
事を思ひて寐もやらず
徘徊躇躇誰人も
うつろふ庭の面影は
つれはあれども我なれば
憐み給へ天津空
入りて枕を侶となし
風の聲だゝ悲しさよ
實に物うきゝ旅ぞかし

早一月の旅衣

旅にゝなれぬ苦しさよ
雲の通路斷ねずとも
あすは來にけん友便り
偶にはあれど其さへも
有るものとてゝ無りけり
いかに見物け其とても
泣になかれず兎や角と
知るや知らずや秋の霜
哀れを見舞ふ氣合あり
あるは馬入に馬を倡
大和心のやる瀬なき
都の人にしられんも
今年のみのり豐けさよ
來るや春の事までも
君が代なれや有がたし
田舍の住居にし然かも
醉ひて管まく其代り

○寒村夜歸

眺むるものは空の雲
斷ねぐなるは文の面
あさては又親や妹
要事のけては何もかも
まいて王子の紅葉だも
想ひやるのみ詮すべも
案ぎ暮すは愚かゝも
千草にかゝる照月も
木の葉の落る音づれも
また雨降に雨に拯
思案なげ首池の鳧
外にはあら玄是はそも
民の命のかゝる紐
嬉しく思ひ云まくも
白きを語る丹の肝
露の恵みの深さにも
東京の摸樣知らせたも

草木も眠る丑三ッを
遠寺の鐘の音凄く

○

我を襲へる九折
洩來る月の片われは

○

聲より外に友もあし
住めば都の鬧がしき

○

權貴の門にへつらひて
まけぬ重荷を負ひ擔き

○

苦痛はしらで春の花
秋は鹿の音月雪と

○

我もの顏にもてあそぶ
自らゆるし友も亦

○

なれし道とて只ひとり
小笹を渡る夜嵐の
登るも暗き杉村を
何地ありけん梟の
斯る淋しき土地あれど
車の塵もかゝらねば
名利に追はれ牛馬に
我と我身に使はるゝ
夏は螢や郭公
四時をり〳〵の景物を
身は昭代の棄材ぞ
瓢一ッに王公や

貴人も知らぬ快樂の
謳へば返す谷の山彦

○世渡りの歌

宜も出來たり實りたり
わけて今年の秋穫を
又とあら玄ぬ國本も
爰にかゝると聞からに
すき返しても長き日の
それのみならぜ霖雨や
夜の目もねずに引板の番
野分の風の無慙やな
世の常なきを嘲つより
嗚呼六づかしの世渡や

○

物うる業はむかしこそ
國のひかりも身の幸も
あら玄ときけば矢ぞ楯も
輸出輸入の平均や
多き吃身を神に謝し

往來の人も稻のなみ
見れば農ほどよき業は
こゝに基ゐし民命も
劔をうりて鋤をかひ
腕も肘もぬけそうに
旱ゑ水のかけ引や
さるに一日野も山も
泣くにもなけ七取分て
外に詮術なかりける
賤しといへぞ今の世は
もとむる道もこの外に
はや溜ち玄と投げ捨て
彼れに得られし商權を

取もどさんと健氣なる
あへなく外れ幔幕の
賣れば借られ買へば損
きゐて果敢なく雲霞
世の常なきを嘲つより
嗚呼六づかしの世渡や

○

棹一本に浮々と
遊びがてらに渡らるゝ
危險を怯ぢず畏れぜに
日頃の伎倆顯はすゝ
よるべき蔓を求めねば
共に根はあきうき草の
誘ふ人なき身の不運
月に嘯き花に醉
世の常なきを嘆つより
嗚呼六づかしの世渡や

○

胸算用の正鵠は
設け處か埒もなく
枝と頼みし資本も子も
あらしの庭の花紅葉
外に詮術なかりけり
此處の泊りや彼所の港
舟子も暴風の危險あり
名譽の海に乗り出し
いと易けれぜ夫とても
よし覓ひとも其蔓も
憂き艱難をよそに見て
はり裂く胸を押鎭め
流る水を友として
外に詮術なかりけり

世わたる業は多けれど
つきて廻はる諺の
おゐ玄羽色の蝶鳥は
其生活は習ふより
傍目をふらずひたすらに
又わすよりと工夫して
其熟練の遺傳とに
はげみ進めばおのづから
ひとひと樂に傍目より
嗚呼いとやすの世渡や

○女子に告ぐ

我が日の本の花ぞかし
我が日の本の人々の
外つ國人も仰ぎ見て
實に此花の咲くときは
其の色其の香其の姿
五大洲中第一の
理りゐれや宜ゐれや
我が日の本の光りぞと
世界に誇る作樂花
愛でぬいゐしと聞ぞかし
花てふ花は多けれど
並べ見るべき花ぞなき
花と讀けん唐詩も
嗚呼樂もしや日の本の

敵れに利あれバ此に害
畔を走るも田をとぶも
おろかゐ事よ細虫すら
なれし手業を怠らず
明日は今日より明後日は
祖先の立てし計畫と
光りを加へ漸くに
我をしらずに一日より
羨むこゐを聞く時は

數にはあらぬ草木にも
然かはあれ共つくづくと
花てふ花も光りてふ
櫻に勝さる花にあり
物言ふ花と人は言ふ
左れど昔は此花を
其養ひを怠りて
自からゐる生ひ立ちに
見るべき花も咲かぞして
開けし御代は畏くも
教ふる園を設られ
惠み到らぬ隈もゐし
時に後れず先ちて
朝ゐ夕なに置き增さる
何ぞかは花の咲ざらん
其の色其の香其の姿
良きに改め人がらを
善き世を造り類ひなき
世界に誇る花は咲く
思ひ廻せば日の本の
光も佐久良ゐあらずして
櫻ゐまさる其の花は
世の乙女子や是ならん
知らざる人の多きより
培ひもせず芸ぎらず
任せし故に大方は
散りにしとの哀しさよ
物言ふ花を移し栽ゑ
東まの東し西の西
物言ふ花に物言はん
教への園に身を委ね
惠みの露に沾はゞ
さて此の花の咲くときは
佐久良はまして國俗を
高きに進め比ひゐき
善き人作り出さんは

皆な此花に由るぞかし
外つ國人も仰ぐべく
是れ日の本の花にして
草木の花は佐久良花
盛りに香ほる時にあり
時を違へず咲きぬれど
姿比らべて咲き亂れ
何の時にあるならん
物言ふ花よ乙女子よ
御代の惠みを能く思ひ
心に掛けて祈るべし

○新年小學生徒に寄す

隙行く駒の足早く
既に過さり盡き果てゝ
春風四方に吹き渡り
雲は間近く降り來て
軒に聳ゆる日の丸の
國の榮ゑを壽きぬ
明治十歳も八餘り
悅び迎ふ新玉の
空に靄靉びく紫の
飾り立てたる門松や
御旗をこめて目出度も
童子乙女は餘念なく
かゝるときこそ爭ひて
我が國人も慕ふべし
又日の本の光りなり
皇國の花は物言花
作樂の花は年毎に
ふたつの花の花比らべ
世界に誇る其春は
早く見まほし逢はまほし
此の理りをとく悟り
皇國の春に入らん日を
心に懸けて祈るべし

或は鞠に或は羽子
實に治まれる御代の春
光り輝やく其の本は
朝夕こゝろ勵まして
花さへ葉さへ咲き茂り
智慧てふ玉を研けばこそ
學びの道を怠らで
いまの御身等は石瓦
敎へ導く師の言葉
何つか光りも增す鏡
ゆめ怠りぞもの學び
幼なき時に學ばずは
今日其玉を研かずば
學べよ學べ道學べ

○鎌倉の大佛に詣でゝ感あり

今をさることかぞふれば
建長のころ鎌倉に
總青銅の大佛は
思ひ〳〵の手遊びは
斯もいみぢく日の本の
敎への庭に吾れ人の
播きにし種の育ち來て
今日より明日と日に益て
童子乙女よ起居にも
通へよ學びの園許へ
光りも出でぬ玉なれど
守りて心盡しなば
世に崇められ愛られん
ゆめ忘れなぞ玉研き
老て必らず悔あらん
明日の光りの失せやらん
研けよ研け玉研け

六百年の其むかし
稻多野局が建られし
御身のたけは五丈にて

相好いと〻圓滿し
何れの地にも比類おし
由井のつゐみの難により
紫磨金仙も雨に濡れ
殆と此に四百年

○

余もこのごろ鎌倉の
杖をひきつゝ大佛に
しかと尊顏見上れば
淨き如來の御心は
涅槃てふ語の思はれて
しばしの間胸の雲
眞如の月の圓かなる
見たるが如き心地せり

○

夫れ物事のなりたちは
昔し羅馬の帝國は
起りしものにあらずして
見者無厭の尊容は
さるに明應四年とや
大殿破壞の其後は
風に暴されたまふこと
こはこれ人に聞くところ
古跡尋ねてをちこちに
詣でゝ心おちつけて
はちすの花もおよびおき
外に見はれ何とおく
凡夫不覺の余とても
霽れて無明の夢は醒め
影を見たるにあらねども
頓にとゝのふことぞおき

シーサルひとり智を奮ひ
德川氏の繁昌わ

家康ひとり德ありて
時勢人情やうやくに
鎌倉山の大佛も
千百年を過ぎし後
鑄ものゝ術の具りて

○

稻多野夫人の時代には
精神こめて手を合せ
わが後世をも祈りしも
生れし人は然はせず
昔の事を思ひやり
技をほむるの外はなし
秋の空にも劣るまじ

○

昔の人の是といひし
今日の眞はあすの僞
非理邪道とおるならん
規律に由りて進化すと
成りしものとお思ひそよ
運びて此に至りてき
浮屠氏の敎へ渡り來て
人の信仰厚くなり
初めておりしものならん
此大佛に打向ひ
天下太平安穩と
今の明治の聖代に
佛の面を打眺め
其鑄工の巧みおる
かゝればかはる時勢かお
事も今では非とぞおる
あすの敎はあさつての
天地萬物一定の
學者は謂へど是を之れ

聢と心に認めたる

○

嗚呼盛んなる大佛よ
からくれゐの黄葉と
人の譽むるに異あらず
如何に時勢の變るとも
歎賞せざることなけん

○シェーキスピーア氏へンリー第四世中の一段

ランカスターのヂウクたり
六萬人の將として
王を俘にかしたれば
四方に逆威を震ひしも
安穩にては置くべきや
戰爭止むとき更になく
スコット人は攻め入れり
王を暗殺謀るもの
議院は權理打ち守り
財政いとも困難し

人は果してかるらん
六百年もたつた川
流るゝ水を年々に
尊體此處に在ます間は
年々人の尋ね來て

王は人望失ひて
其晩年に至りては
心で心責められて
なすことあらぬ苦しさよ
そのありさまを寫したる
廣き世界のその中に
ヘンリー四世あらざるは
最と下賤ある我人の
今しも眠る其數は
あゝ羨しうらやまし
天より我に賜はりて
如何ある罪の祟にや
たとへ暫時の間あり共
瞼を閉ぢて眠らんと
そも如何なれば眠神
くすばりかへる蒙の床
心地もよげに横たはり
とびくる虫の羽音さへ

健康漸く衰へて
自ら悔もる其惡事
安眠とては片時も
此一篇はこれぞこれ
シェーキスピアの名作ぞ
王者の數は多けれど
幾人ありや聞かまほし
枕を高く高いびき
幾千萬かあるあらん
眠の神よねむり神
伽するとこそ云ふべけれ
眠の神に見はなされ
胸の苦しさ忘れたき
如何にすれども眠られず
見る影もなきあばら家の
むさ苦しきも厭はずに
枕のほとりぶん〳〵と
眠りを誘ふ助にて

すやすや眠るものあるに
床の上なる天蓋は
眠りを誘ふ樂の音は
貴人高位の寢屋までは
實に愚かなる神ぞかし
不潔な床に横たはる
王者の床に來らぬぞ
比べものにはあらぬのを
ものうくもゆる帆柱の
水夫の目をば閉ぢさして
吹き來る嵐凄まじく
天地とゝろく涙音は
下ゑ無間の地獄なる
涙にもらめき眠らする
總身水にひたされて
斯く騷しき其折も
草木も眠る丑滿に
手を替へ品を替へるとも
伽羅沈香を炷き立てゝ
金襴緞子以て作り
最と心地よく聞もなる
何とて來ることのおさ
何故にかく見苦しき
下賤なる者と寐はするも
金の時計と號鐘と
はていぶかしき神の意ぞ
高き上にも安く寐る
情け用捨も荒涙や
うづまく涙をまき上げて
死人も覺むる程なるに
高き柱の其上で
神の力ぞ不思儀なる
身を粉に碎く水夫には
眠の神はつきそふに
眠を誘ふ其工風
王者の傍に來らぬは
依怙贔負なる神にこそ
眠れや眠れや美し
冠着たる頭程
わゝ幸多き賤の身は
つらく思ひ合はすれば
苦しきものは世にあらじ

○題レ秋　（西詩和譯）

早やさしにけり秋の影　庭の木の葉はちりぐと
そよ吹く風に飜へり　草屋を囲む垣の面の
苔のあからみいと深き

○

賤の小家の賤けさは　千ひちの金に勝るなり
浮世の塵をよそに見る　此らくれ家に聞もるは
時つく遠き鐘の聲

○

夏の緑も消ゆはてゝ　山々深し秋のいろ
谷の水際に咲き殘る　小草の華の紫も
色いとさめて哀れあり

○

秋の景色とあるにつれ　時は來にけり去年迄は
谷間を越ゆて諸共に　登り遊びしあの山に

黄昏時にあるまでも

○

今われ爰に唯ひとり
移り傾く日の影に
猶幼げに見もるあり

○

移りきゑ行く夕日影
西の山端のくれあゐの
黄昏暗くなるまでも

○西詩和譯

暴風に雨を吹きませて
海面さこそと思はるれ
今日は漁業休みなん

右一章

獸の踪を尋ねんは
岩間に哮る獅子もわれ
今日は山獵休みなん

右二章

待てども更に聲はせで
健く幼き面さしの
獨り行む戸のそとに
色もいつしか消うせて

最すさまじき聲すあり
岸うつ波の音高き
嗚呼畏ろしき聲斗り
いと〳〵難し今日の空
谷間に嘯く虎もわれ
嗚呼畏ろしき聲斗り

海に幸ある舟子とも
市に歸れはこは如何に
此所も彼所も怪我人の

右三章

○西詩和譯

息の出入とからだの血
清きたましひくれ命
遽に變る針の位置
なきは則ち無能無智
よき働きを爲せる後

山に幸ある獵男とも
さきの地震に家つぶれ
嗚呼畏ろしき聲斗り
しかのみならず宜心地
時計のめぐり早くたち
歳はすぐとも業とさち
多く考へ氣をたもち
おがしと言はんこの命

○社會學の原理に題す

宇宙の事は彼是の
規律の無きは有ぬかし
微かに見もる星とても
云へる力のある故ぞ
又定まれる法ありて
且つ天体の歴廻れる
必ず定まりあるものぞ

別を論せず諸共に
天の懸れる日月や
動くは共に引力と
其引力の働は
猥りに引ける者ならず
行道とても同じと
又雨風や雷や

地震の如く乱暴に一にさだまる法はあり地をゝふ虫や四足や其組織より動作まで又万物は皆共にあらざる物は無ぞあし別を論せず諸共に遺傳の法で子に傳へ適せぬものは衰へて桔梗かるかや女郎花牡丹に縁の唐獅子や木の間に囀る鶯や雲井に名のる杜鵑友を慕ひて奥山に譯も分らで貝の音に竿に近き猿はまだ靈とも云へる人とても元を質せば一様に外面は見もる者とても野山に生ふる草木や空翔けりもく鳥類も都て規律のあるものぞ深き由來と變遷の鳥けだものや草木の親に備はる性質は適するそのは榮へゆき今の世界に在るものは梅や櫻や萩牡丹柴の葉に止まる蝶々や門邊にあさる知更鳥や同去友をば呼子鳥紅葉ふみわけ啼く鹿や追はきてわゆむ牛羊愚なとよ萬物の今の體も腦力も一代増に少しづゝ

積み重なれる結果ぞと見極めたるは是ぞこれ優すも劣らぬ腦力の是に劣らぬスペンサー化醇の法に進むのは動物而已にあらずして活物死物夫而已か區別は更になかりしを感ずるも尚は餘りあり思想智識の發達も社會の事も皆都て既にものせる哲學の生物學の原理やら士臺とおして今更に書にものさるゝ最中ぞそも社會とは何ものぞ其結搆に作用に種族と親と其子等の今古無双の濶眼でアリストートル、ニウトンにダルウヰン氏の發明ぞ同じ道理を擴張しまのあたりみる草木や凡そ有としあるものは有形無形夫れ〳〵の眞理極めし其知識されば心の働や言語宗旨の改良も同し理合のものあれば原理の論ぞ之わ次ぐ心理の學の原理をば社會の學の原理をば此書に載て說かるゝは其發達は如何あるぞ社會の種類如何あるや利害の異同如何あるや

男女の中の交際や取扱の異同やら違ひの起る原因や其變遷の原因や智識美術や道德の遷り變りて化醇する論述ありて三卷の最も目出度美擧にこそ讀たる者は誰ありて實に珍敷き良書なり何から何とせをやく走り書やら空しやべり天下の事は一と飲みと新聞記者や演說家人をあやめる罪とがの月日の事や星の事夫等の事はさて置きて疊一枚させばとて

女子に子供の有樣や種々の政府の違ひやら僧侶社會のある故や儀式工業國言葉時と場所との異同にて其有樣を詳細に長き文にだせらるべき既に出てたる一卷を此書を褒めぬ者ぞなき社會の事に手を出して責任重き役人や舌も廻らぬくせにして法螺吹き立て利口ぶる此書を讀て思慮あさば少しは減りも爲ならん動植物や金屬や凡そ天下の事業は足袋を一足縫へ心とて

長の年月年季入れ出來る事にい有ざるに年季も入らず學問も新聞記者や役人と箇樣な者が多ければ尙ほ恐ろしき虛無黨の操めに操めたる其上句秩序も建たず自由なく再び浪風靜まりて百年足らず掛らんは有樣見ても知られたる安に手出しする勿れ廣き世界の其中に盲目同士の戰に覘ひきまらぬ棒打の今の世界は旋風烈しき中へつい一寸足も据はらぬ瞑眩き寢る眼も寢ずに習はねば獨り社會の事計りするに及ばぬ譯なれば成は最と最と易けれど忽ち國に社會黨起るは鏡に見る如し虻蜂取らずの丸潰れ泥海にこそあるべけれ太平會と成る迄は革命以後の佛蘭西のそこに心が付きたらば安にしやべると勿れ恐るべきもの多けれど越したる者は有ぬかし仲間入りこそ危ふけれ烈しく旋る時あるぞ絡き込まれたら運の盡頭はいとゞぐら付きて

廻〳〵と廻されて
上句のはては空中へ
初て悟る其時ハ
後悔先きに立ぬなり
其吹く中へ過ちて
上手とまそは云べけれ
興論を誘ふ人たちは
能く慎みて輕卒に

○熊谷直實曉に敦盛を追ふの歌

抑も熊谷直實は
關東一の旗頭
世にも知られし勇士あり
源平須磨の戰ひに
聞くも中々あはれあり
沖なる船に後れ玄と
一丁許り進みしを
互にしのぎを削りしが
花も粧ふ薄化粧
透間も非ず廻はされて
絡き上られて落されて
早遲蒔の唐椒
颶風烈しく吹く時は
船を入れぬが楫取の
政府の楫を取る者や
社會學をバ勉强し
働かぬやう願はしや

賴朝公の御内にて
智勇兼備の大將と
左れば元歷元年の
功名ありし物語り
その時平家の武者一騎
駒を浪間に打入れて
扇を揚げて呼び戻し
見れば二八の御顏に
涅齒黑々と附け給ひ
斯るやさしき打扮に
名乘り給へとありければ
參議經盛三男の
早々首をうたれよと
流石にたけき熊谷も
落つる涙はとゝまらず
是非なく太刀を振り揚て
首は前にと落ちにける
須磨の嵐に散りにけり
跡を吊ひ申さんと
青葉の笛を取添へて
實にあさけある武夫の
その身は遂に世を遁れ
元祖大師を師と賴み
晝夜念佛怠らず

○玉の緒の歌

眠る心は死ぬるあり
わすをも知ぬ我命
君は如何なる御方ぞ
下より御聲爽かに
無官の太夫敦盛ぞ
西に向ひて手を合す
我が子の事を思ひやり
鎧の袖に絞りつゝ
南無阿彌陀佛の聲共に
無殘や花の苔さへ
之を菩提の種として
御あき骸に言ひ遺こし
八島の陣へ送りしは
心の中ぞあはれなり
蓮生法師と名のりつゝ
剃髮禪衣の身と成て
目出度往生遂げにけり

見ゆる形はおぼろあり
あはれはかなき夢ぞかし

あゞ〻あはれに云は悪し

○

我命こそまことなれ
墓は終の場所あらず
いふはかちだのうへのと

○

人の願はよろこびか
人の願はこれあらず
今日より優る明日をまて

○

業は久しく時い馳す
鼓の如く擊ち續け
死出の旅をゞはやとある

○

爭ひ多き世の中に
なりてます〳〵進むべし
率かるゝ牛とある勿れ

○

我命こそまことなれ
人は塵にて又散ると

人の願はかなしみこの
唯怠たらずはたらきて

強き胸だも亦たえず
一ト日〳〵にちかくなる

此身を寄せて先鞭に
言あき啞とある勿れ

如何に未來は樂しきも
共に之をば捨てふきて
はたらくべきは今日計り

○

すぐれたる人世に多し
勉め勵まば斯くあらん
長く殘さん此名をゞ

○

海より荒き世の中に
獨り漂ふ我友は
我名を聞きて進まなん

○

さすれば人は氣を張りて
如何なる運も事とせず
樂あるぞはたらけよ

○外交の歌

西に英吉利北に魯西亞
外表に結ぶ條約も

如何に空しき過去あるも
われを忘れず神を知り

われとても人相同じ
もめ怠たらず勉めあば

舟失ひて波の間に
我名を聞きて勇まなん

事業ばかりに心して
高きに至れ馳せもけよ

油斷な爲せそ國の人
心の底は測かられず

萬國公法ありとても
強弱肉を爭ふは
嗚呼同胞の兄弟よ
盡せや盡せ諸共に

○ロングフェロー氏兒童の詩

來れわらべ傍はらに
我等が多年苦みて
忽ち解けし露はゞの

○

汝か遊びたはるゝを
窓打わけて日に向ひ
清く流るゝ川水に

○

流るゝ水も鳥の音も
心の如くゆたかなり
かゝしき秋も過去りて

○

童はべ無くば世の中い

いざ事あらば腕力の
覺悟の前のとかるゝ
御國に生れし甲斐あらば
まごゝろ込てつくすべし

○

汝が遊ぶさま見れば
なほとけざりし疑は
曇りも胸に止まらず

○

見るは恰も東なる
さえづる鳥の聲聞て
驕ぶが如き心地せり

○

照らすあさひも汝等の
されゞ我等の心中は
寒き雪霜ふりにけり

如何に苦しきとならん

童はべ無くば我々は
前を望むもうばたまの

○

知らずや茂る森の木は
清き空氣や日の光り
善き汁液を造り成し

○

知れよ閉けき氣候をば
幹にはあらで軟かき
森を此世にたとふれば

○

來れ童はべかたはらに
花に戯れ啼く鳥も
如何ある事ぞ告るやを

○

思慮を巡らし智を竭し
我等が書ける文とても
汝が面の樂しさに

後ふり向も憂さばかり
闇の夜中に異あらず

いと美しき緑葉に
其作用を施して
幹と枝とを養ふを

うけて早くも感ずるは
緑の葉にてありぬるを
葉は童はべに比ぶべし

のどけき天を吹く風も
汝が清きこゝろには
我耳近くさゝやけよ

我等が成せる業とても
汝が樣のかはゆさに
比ぶるとのあるべきや

○

人の賞する詩や歌ハ
完全無缺の汝等に
汝は生ける詩歌あり

○離別の曲

今日の團居のたのしみも
名殘りは最早今日限り

○

今宵隅田の月の宴
語らふひまも今暫し

○送し友

七年八年とく經ちて
最早終りて今日こゝに
社會の海に乘出し
技藝の梶を運轉し
さは去りながら我友よ
其身を守りつゝしみて
雨の夕べや雪の朝
思ひ出でなむふしあらば
世に數多くあるなれど
及ぶべき者あらずかし
他は皆死にし言葉のみ
明日は離別の憂苦勞
遊び暮らさん日暮まで
明日は旅立つ難波潟
酌みてわかさむ餘宵
學びの窓のくるしみも
祝する君がかしまだち
名譽の風に帆を揚て
進みゆくこそ愉快あれ
野分の風や風に
自愛の心怠るな
深き昔の交りを
風の便に音信れよ

○見二蠟蛾一有レ感

時しも夏のやみの夜に
東の窓の其もとに
涼しき風を送り越し
いと美しき蝶々の
取らまくぞする有樣を
深く心に藏め置き
抑も難を企だつは
又其本を見ざりせば
等しき業やなすからん
取まくするハ愚あらずや
あさまくするは愚あり
其身失せては遂がたし
しめて其身の燒もせず
進みて後にはまれ得て
名譽の人と呼ばゝれん

○藤袴の歌

文書かんとて我庵の
燈ともせば庭の木の
衣を通し吹くにつれ
翻めき來り燈びを
見れば悟の有磯海
守らんとする事ぞある
惡きことにハあらねども
今しも來りし蝶々に
燒ても思ふ其火をば
死しても難き其事を
其身わりてぞ事遂ぐる
されば撓まぬ心をば
殺しもあさぬ道をとり
後に鑑を殘すべき
名譽の人と呼ばゝれん

數ふれば、はや二とせの旅枕、ふるさとかれにし秋風も、一

ことしはさすが聞きおれて、憂きとも知らず白雲の、棚引く間よりもる月の、かげも隅田の夕ばえを、ひとりあがむる蓬生に、ふる里人のおとづれて、いとめづらしき藤袴、明石も須磨もあれ庭に、時し忘れて咲きにほふ、なれが色香を言の葉に、そへてはるゝおこせにし、深きなさけを杯に、うけて酌みつゝ敷島の、やまとのみかは海原の、よそなる國のことまでも、思ひ渡せば世の中の、つら死ためしも人の身の、ふさはぬことも有磯海、濱の眞砂のかずよりも、なほさはなればきみが爲め、うづもるゝ身はなには潟、あしのふしざへおかゝに、よしともいはん秋の夜の、旅のあはれもふる里の、春に逢ひぬる心地とやいはむ

○小督の歌

牡鹿なく、此の山里とおいじけん、嵯峨のあたりの秋の頃、ちぐさの花もさまゞに、虫の恨みも深きよの、月にまつ虫招くは尾花、萩には露の玉虫や、そよぐをぎ虫くつは虫、啼音につれて中國が、寮の御馬たまはりて、とのゐすがたの藤袴、たづぬる人のおもかげに、たつ薄

霧の女郎花、それかあらぬかまばろしの、蓬が島根たづねわび、駒引とむる篠のくま、息ふかげの松風に、かよふつまおとつまごひの、ねふよる鹿にわらねども、昔し覺もるふね竹や、合すしらべのまがひあき、こゑをしるべにしたひよる、嵯峨野の奥のかたをり戸、想夫戀の唱哥は、比翼の翹の雲井を越へ、盤涉調のしらべは、松の連理の枝にかよふ、小督の局世を忍ぶ、すみかも明日は大原に、かへん姿のなごりとて、よはに手習すつまごとの、いはこと思ひせきかねて、涙に袖をかゝしばや、人目も如何あやめがた、糸の色音をしるべにて、さし入月の雲井より、御使にまゐりしと、かしこき君が詔り、野べのをちかたわけきつゝ、露の玉章さし寄する、つまどのはしの緣の綱、又ひき結ぶ御還りごと、そへて玉はるいつゝ衣、きぬ〳〵送るほどもなく、迎への車たてまつり、昔しにかへる百敷やく、千代を契りの松のことのは、

○東の花

吉野よく。見し人は不知。花は東さの隅田川。よにゐ

ぬ春の。ひとりそや。みやこどりに。事問ひし。昔には
わず渡し守。春に暇無くみなれざや。指して堤を行
き通ふ。人の袂のわけみどり。柳の絲に引かれ來て、
長き日暮らし花の香を。袖にしめてはくみかはし。遊
び戯れつたをやめの。哥ふ一トふしもみならむ、殘らじ
袖のうつり香を、如何に定めむ咲きにほふ、花の手枕ら
夢ならで。かはすもわだの花の影。流石嬉しきゆかりに
も、紫さきおふる武藏野の。廣き惠みや仰ぐら
ん。尙行末も千代八千代。長き堤の花櫻。榮へ榮へ
ん御代の春、

○長恨歌

今は昔し唐しに、色をたもんじ玉ひける、帝おとしませ
しとき、楊家の娘めかしこくも、君に召れて朝ゆふの、
御寵みあさからず、常にかたはらに侍りぬ、宮の內の
たをや女三千の寵愛も、わが身ひとつの春の花、ちりて
いろ香も亡き魂の、ありかを尋ねみあれざは、さして
はるゞ行く舟に、法士は涙のうきぎぬする、常世の國
に來て見れば、樓閣玲瓏として五雲たこり、うちにおま

めく女の童、ことにすぐれて玉眞の。すがたはいづれ
李花一枝。あめを帶びたる其の氣はひ。見るよりそ
れとことのはも。涙こぼれて欄干を、ひたすもいかに
なれ染し。驪山の昔し思ひある。あらおつかしの都
人。とづかしながら在し夜の。其のむつごとも消ねは
つる。露のちぎりのうさはらし。云ふてみよおらひと
かたに。御思召すかや深き江に。春の氷の薄きはい
やよ。思ひ逢ふよはうちとけて。寢みだれ髪を其ま
ゝに。とりつくろはぬ女氣を。かあいがらんせからすば
の。色に此の身を染め糸の。結ぶもかたきかたらひも。
緣つきぬればいたづらに。またこの島にかへりきて。
尙なつかしき古へを。思ひいづればあはれなる。驚破
霓裳羽衣の曲。まれにぞかへす乙女子が。まれにぞかへ
す乙女子が。袖うちふりし心しりきや。さるにても君
には此の世。あひみんことも。よもぎが島つどり。うき
よなれども。變しやむかし。戀しや昔しの物がたり。つ
くさば月日もうつりまひ。しろしのかんさし。たま
はりて。都にかへる家づとは。ふみにもおさるふみ

月の。七日のよはの私語。ひよくれんりもいまいはや。かれ〳〵なりしうきちぎり。天のとこしのなへおるも、つちの久しくふりぬるも。つくるときわり此の恨み。綿々涙々としてたゆまなく。今にのこせし筆のあと

○櫻がり

長閑なる、頃もさらぎおしおべて、見わたす山もうちけむり、柳のいとのわさ緑、春のゐしきかゐやおくも、都にしらぬしらくものの、たてるやしるべ櫻狩り、人のこゝろもわこがるゝ、そらを見すてゝこしぢには、まつらむものを行雁の、かほるゝ翼は空にきゑ、聲はあとれに聞もおり、行衛したひてたちぞまり。おごりはしばしわすれねど。初花ぐるまめぐるひの。おがへつらねて。見ずもあらず。見もせぬ人や花の友。しるもしらぬも花の影。あひやどりしてすがのねの。長き春日もいたづらに。日影すごして花ごろも。なれしたもとの香に そみて。野邊も山べも花もへに。いたらぬくまはおけれども。やまのいはねをとめて落る。千すぢ白らすぢ。佐保姫の。手びねの糸の。たきおくは手折てもかんいりあひの。鐘よりさきに春霞。たちおかくしそ風は吹とも

○芙蓉を咏する歌

ましろおる。たか根もはるはさくら花。さくやひめとはかみよの昔し。神代も花のいろさかり。花のすがたのいとらし。しんぞいとしらし。いともかしこき。人のよに。ふしもすぐなる竹取の。翁のむすめはよいむすめ。みがきたてたるかつらのまもに。かほはてりそふ秋のよの、月にかこちてふるさとを。戀ひしかるやつしたふやつ。やつとやつとを指折見れば。二八十六でふみたまづさを。鴈が持てくる雲井より。ちらと觀せたは冬たつ天に。降り來る雪のはだじまん、これ觀よがしに三保の松。羽衣もとゝいふ迷言かけた。天津乙女はうはきのわだか。をとこびでりか此の年月を。しづがふせやに假り枕ら。絲も操りいはたをり〳〵に。霓裳羽衣の曲をなし。東まわそびの駿河舞。雨にうるほふ花の袖。かへすたもとに充滿の寶ちを普ねく。世ふふらせ、施こしたまふいつくしみ。盡ぬそのおは蓬萊の

山又茲に富士のねの。扇の裾野する廣き、ゐ國の要めと祝しけり

○西行の歌

われもむかしはますらをの。眞弓つき弓とりをへて。引きたがへたるわさ夕は。命なりけり旅衣。こけの衣に身をそめかへて。心のちりの袖はらふ。やぼおせかいにいとしこの。いとしかあいは昔しのこと。よのよしの山こぞのしをりの道かへて。まだ觀ぬ花の色々を。たづねくてうた枕。ふでのすさみの墨染櫻。うつろふ春の花のかほ。やせるすがたに。おさきたなりを。水の鏡にかけとめて。しばし立よる柳かげ

○謫居の哥

信濃路は。ひなにはあれどうらくはし、やまにものにもはるされは。はおさきをゝり秋つけば、紅葉にはへりそをめでゝ、のもき山もきあまつ日の。くるゝもしらず遊ぶなる。人もさはなりしかれども。さすらへるみは春の野の花もかざゝす。秋山の紅葉をも見ずたちちねの。えゝのかふこのまゆごもり。こもりておがく年ぞ經にける

新体軍歌大全終

明治二十年七月廿二日印刷
同　年七月廿四日出版
同　年八月十二日再版

版權所有

發行者　梅原忠藏　大阪市東區北久太郎町四丁目番外壹番邸　圖書出版會社名代入
編者　中山竹峰　大阪市北區相生町二百五十三番邸寄留
印刷者　前野茂久次　大阪市南區長堀橋筋二丁目八十番屋敷
發行所　圖書出版會社　大阪市東區北久太郎町四丁目番外壹番邸

圖書出版會社藏版甲部賣捌所
大阪市東區淡路町三丁目　金川善兵衛
同　東區備後町四丁目　梅原龜七
同　東區備後町四丁目　吉岡平助
同　東區安土町四丁目　積善館
同　東區北久太郎町四丁目　岡本仙助
同　東區北久宝寺町四丁目　濱本伊三郎
同　南區心齋橋北詰北へ入　中村芳松
同　南區瀧町三丁目　岡本宇野
福岡縣筑前博多中島町　積善館支店　山田安貞
兵庫縣神戸市元町五丁目　吉岡支店
京都市上京區寺町通二條下ル　梅原支店
京都市上京區寺町通二條下ル　河合卯之助
廣島市通町三丁目　阪井萬吉

教育勅語問答

三重縣尋常中學校長清水誠吾君序文
帝國文科大學教授 內藤耻叟君校閱文
三重縣尋常中學校岡嶋安平君編述

昨明治廿三年下し賜ふ所の教育勅語は簡にして聖意の在る所深遠にして何人にも容易に之を窺ひ奉る能はず況んや淺學少年の輩に於てをや故に此勅語を解したる書も多しと雖も普通の解釋にして到底其意を通達するを得ず故に本書は一字一語に就て問を起し之に答へたるものにして其問答の方法は著者朝夕教授乃際毎に聖旨の在る所を學げて之を生徒に授け生徒も亦疑義を質したるを講述し質義せし所の者を蒐めて一書と爲したるものにして此勅語の聖旨の在る所を知るは此書に如くものなし而して此勅語は小學生徒乃必ず讀まざる可からざるものなれは奬勵品に一部を與へらるゝには適當の書なるべきなり

飯尾千尋先生著

●上等洋紙印刷鮮明洋裝美本全一册●特別正價金十錢郵稅二錢

勅語全文朱印刷附

山兒立志美談

本書は貧賤より起つて天下を經綸するの英雄豪傑となり或は一商家の奴僕より出て豪商紳士となつて天下の財政を左右し或は辛苦經營して世に偉功を立て大益を與へたる事蹟を輯めたる書にして一讀以て驚歎感激せしめ小兒たる者の立志の基と爲す其文章は至極平易にして訓解を施し處々に圖を寫し之を實地に觀せしむる如く實に小兒たる者の金科玉條さるべき書なり是に於て乎本書發兌以來日尚は淺く雖も既に數千部を賣盡し今又再版の期を見るに至れり而て本書は學校教授の參考書となし學力優等の者に賞與品とするに至極適當の良書なり

●今般特別正價金十二錢郵稅四錢

極彩畫數十個及び口繪入印刷鮮明洋裝美本全一册

特別大賣捌所

東京 三省堂書店
全 榮三郎
全 覺張
全 大倉孫兵衛
全 小林新兵衛
全 大川屋書店
全 西原國太郎
越後 長岡目黑十郎
長岡 松田周平
長原 張治平
水戸 長谷川六左衛門
三條 葛塚弦卷七十郎
葛飾 小口樋左衛門
新潟 林櫻井留吉
新潟 櫻井留吉
高田 西澤喜太郎
長野 高田直三郎
飯田 奥村文書店
北海道函館 伊藤直三郎
北海道函館 伊藤直三郎
信濃 大田橋善次郎
全 中田橋善次郎
全 越中富山 大田橋善次郎
全 高岡
全 富山
全 河原
駿河 三浦源助
靜岡 川瀨代助
全 廣瀨重兵衛
全 高岡市藏
全 富山
全 高岡
飛彈 高山 片野東四三郎
美濃 岐阜 太田善平
尾張 名古屋 近藤池
全 加賀金澤
全 大聖寺 福田町
越前 福井 深澤三郎
全 岡崎伊三郎
全 城崎左喜助
伊勢 津 豐島住藏
近江 大津 河內右衛門
若狹 小濱 小川儀平
全 細川安之助
全 北川沿兵衛
丹波 柏原 熊谷幸助
兵庫縣 神戸 中井正吉
全 內藤七郎
全 阪田
備前 岡山 武內彌三郎
大和 奈良 假谷趣太郎
全 龜岡
全 西町
全 本町
備後 尾道 森澤六八
福山 大黑町 西澤元次郎
全 三木 茨田藏
全 妹尾 牛兵衛
全 先進堂

備後 尾道 藤井周四
全 久保町 大成堂
全 安藤廣島 兒玉保兵衛
備後 福山 友田清水庫三郎
全 府中 松村善助
全 深津 田上三郎
全 西橫町 白銀伊兵衛
全 忠海 宮川清一
全 國太郎 山口清吉
周防 岩國 周防山口 新田
長門 船木 生田
全 赤間ヶ關 山名松次郎
全 山口中市町 塞翁堂
出雲 松江 大川岡清利七
伯耆 米子 園山喜右衛門
因州 鳥取上魚町 今井
全 大工町 橫山安次郎
全 諸岐琴平 山本吉太郎
全 丸龜 箸方儀三郎
全 高松 盛田保藏
全 豫松山 宮脇伸次郎
全 向井藏次郎
土佐 高知 世羅織次郎
全 澤本
全 中村
全 山本駒吉
紀州 和歌山 平井
筑前 博多 林爺
全 筑後 久留米 高田芳太郎
全 竹
全 米 小柳
全 子 幸次郎
全 司 儀平
全 平 赤內
全 助 莊
肥前 佐賀 河會社
全 籍
全 長崎 田中房二郎
全 鶴野常藏
全 野 小野左右輔
肥後 熊本 半三郎
全 高瀨 信濃
全 天草 安中
全 山口 玉良川
全 村 長崎次郎
佐世保港 伊田周次
全 浦平
全 田
全 澤
豐後 大分 豐前小倉魚町 辛島庄三郎
豐後 甲斐治平
豐前 小倉 山川
薩摩 鹿兒島 吉田倉吉
全 宇兵衛
壹岐 輝之浦 今屋敷町 倉成惣二郎
對州 嚴原 西村書店

永松乙二君著

小學少年教育美談

●石版美本全一册●挿畫數十個入印刷鮮明洋裝●特別正價金十二錢郵税四錢

方今諸學校に於ては德育を主とし修身を第一として教授するに至れり是ゝ於てか修身に係る書陸續發兌せと雖ゝ或は高尚に或は事蹟の冗長なる少年に教授するにも少年自からこれを讀むも誠に鮮し難くして文の長きゝ倦み適當の書たるを見す本書は專ら學校に於て生徒に向ひ修身の美談を爲すの用ゝ供せんと欲し文簡短に事蹟は其要を摘み教ふるに便に自から讀みて曉り易きを謀り至極平易に書たるものなれは小學校には最も適當の書なり且つ本書の如きは品行方正學力優等の生徒に賞與品とするに供せんと欲して体裁を美麗ゝし廉價を以て主とす請ふ宜く一讀して其誣言にあらさるを知り賜へ

河合東涯先生著

初學衍義教育修身美談

●挿畫數十個入●印刷鮮明洋裝美本全一册●特別正價金十二錢●郵税金四錢

本書の明治廿三年下し賜ふ所の教育勅語を一字一句毎に俗話に註解を加へ小學生徒をして聖意のある所の辱きを知らしめんと欲せ之に加ふるに古今の忠孝節婦博愛仁慈義勇の著しき者の事蹟を其の聖旨乃ある所に掲げて其一例を示し且つ圖を挿み一讀して曉り易からしむ抑も此勅語のかしこく辱き我等臣民は固より父兄たる者は能く其子に示して聖旨を奉體せしめさるへからさ故ゝ生徒たるものは必ず一部を備へて誦讀暗記すへし而して生徒と雖も一々之を購讀するゝ至らさる情狀なるを以て宜しく品行方正學力優等の生ゝ賞與品として普く讀ましむへし

三宅弘先生著

日本歴史美談

●挿畫數十個入●上等洋紙印刷鮮明洋裝美本全一册●特別正價金十二錢●郵税四錢

我邦に生息して我邦の歴史を知らさるは實に恥づへき事なり況や各國の歴史を小學生徒等に讀ましめんと欲や本書は我邦の歴史を小學生徒等に讀ましめんと欲し極く了解ゝ易く上古より今の明治聖世に至る迄を簡短にして明瞭に解き生徒等をして一讀以て治亂興亡、年代、系統、政權、等の事蹟を知らしめ其間著名なる戰亂、治蹟、進歩沿革、等は其人及び事蹟を詳に記し加ふるに圖を挿み當時の狀況を示たる書にて實に小學生徒等の讀むへき歴史とは此書を謂へき也故ゝ本書は學校ゝ備へ教授ノ參考とし又生徒の奬勵品に適當なる良書なり請ふ速に求て其の有益なるを知り賜へ

金谷可美男君著

教育一經濟美談

●挿畫數十個入●上等洋紙印刷鮮明洋裝美本全一册●特別正價金十二錢●郵税四錢

本書は少年に解し易き樣極くたやすき文字にて經濟の事を說きたるものゝして先づ初めに經濟の大要を說き經濟とは如何なることゝや其經濟は實に人生の世ゝ處するに第一心得置かねばならぬ渡世學問なることを明ゝし次に古今經濟を以て一身の出世を爲したる人の事柄を數百人輯めて其實例を示す書にて經濟の面白き話を讀む間に自然と經濟の道を知り得るものゝして今日の如き經濟の世の中に小年に經濟の事を教ふるには最も此書物が有益なり又其間へ挿むに奇麗なる密畫數十個を以てしたれば今日まで經濟を教ふるに斯の如き便益なる書は一册も見さる所なり身分の貴賤と男女とを問はす實に讀まさるへからさる書なり又小學校の生徒に奬勵品として與ふるには適當なる良書なり

三宅　鼎先生著

選び文　寺作文新書

●洋裝順美●特別●正價　金廿八錢　郵便稅金八錢

●紙數四百廿頁●作法及石版刷入勅語入

本書は高等小學校及び中師範學校生徒其他初學者の作文を習ふの便益に供せんと欲して其順序階梯を正し文章に至極流暢にして而して當時に適切なる新奇の熟語を用ゐて其作例の如きは古文を載せず當今の文章家の作りたるものを輯め其間編者の著作にして題の新奇なるものを加へ殆んど千題を記し數種の部門に分ち必要の例題にしてこれらざるはなし且つ整頭には和文の作方例題等を掲げたる書にして從來世に出版しわる多くの書中にて斟酌折衷して最も適切最も新機軸を出したる書なり讀者宜しく人智は日に進み後者は必ず前書より優る事を了察し賜ひて速かに購讀せられよ

函館私立幼稚園主武藤やち女序文
岡本可亭君著述

●高等普通　新體婦女用文　●紙數四百卅頁余●美術書插入印刷鮮明洋裝順美本全一冊●特別　今般　金廿五錢　郵便稅金八錢

從來婦女用文章の書多しと雖も唯だ其一端を記したるのみにして未だ完全なる書を見ず本書は岡本可亭先生時日を腐腦を費し其學ふへき順序階梯を整へ淺きより深きに入るの法に編し先生得意の筆を以て其文章の巧妙なる文明世界の婦女に適當し加ふるに齧頭に和語畧解、冠辭畧解　假名遣、送り假名、百人一首、近世才藻、女大學其他凡て婦女文學に必要なるものを掲げ實に婦女たる者座右に備へさるへからさる書也